
僕がヒナギクさんでヒナギクさんが僕で

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕がヒナギクさんでヒナギクさんが僕で

【Nコード】

N5985D

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

ある日、階段で足を踏み外したヒナギクを助けようとしたハヤテは、ヒナギクと一緒に階段から転げ落ちてしまい……。若干、美希編とリンクしてます。更新はのんびり行きます

第01話：入れ替わっちゃった！？（前書き）

えー、短編にしようと思ったんですが、予想以上に長くなったので連載形式にさせて頂きました。>br<若干、美希編と繋がってます。>br<では、お読み下さい。

第01話：入れ替わっちゃった！？

東京都練馬区東全部と言うアバウトな住所の場所に、三千院家の
広大なお屋敷はある。

そのお屋敷におわすのは、主人の三千院さんぜんいん 凧あやさきと執事の綾崎あやさき 颯。
そしてメイドのマリア。ついでに執事長の倉臼クラウス 征史郎の四人であ
る。

「どうして私はついなんですか！？」
クラウスが何か文句を言っている様だが我々の気分で黙殺してお
く。

その日、ナギの下に桂かつら 雛菊は遊びに来ていた。
理由はナギのしょうもない思い付きである。

「一寸、ハヤテくん」

専用部屋で二人プレイモードのダンスゲームをしながらヒナギク
は隣で同じ様に踊っているハヤテに声を掛けた。

「何ですか、ヒナギクさん？」

ハヤテは画面から目を離さず、左右前後と踊り続けながら訊く。

「少しは手加減しなさいよ」

「いえ、それでは僕が敗けてしまい、お嬢様に怒られる気がするの
でやめておきます」

事の発端は五時間前。

ナギがハヤテの部屋に飛び込んできてきこったのだ。

「ハヤテ、ゲームで最強を決めるぞ」

「はい？」

ナギの言葉を理解出来なかったハヤテはそう返答した。

「だからゲームだよ。ゲームで一番最強なのは誰かを決めるんだ」

「はあ。それで、誰を呼んだんです？」

「私よ」

と現れたのはヒナギクだった。

「遊ばうって言われたから来てみたらゲームで最強を競うって一体何よ？」

訳が解らないわ　と肩をすくめるヒナギク。

「よし、じゃあ専用部屋へ行くぞ」

ナギはそう言ってダンスゲームの筐体きょうたいがある専用部屋へ二人を案内した。

「今からお前たちにはこれをやって貰う」

「・・・どうしたんですか、この筐体？」

ハヤテが訊くとナギは、am zonでプレ　テのソフトだと思
って買ったら間違ってゲーセン等に置かれてるその筐体を購入し
てしまった、と言う。

それに対してヒナギクが突っ込んだ。

「間違えるってどんだけよあんだ！？て言うか、そもそもそんな物
がam zonにある訳？」

「無いですよ、普通」

「知るか！兎に角お前たち、位置に着け！」

「これで何を競おうって訳？」

「それは勿論あれだ。この間、白皇の文化祭であつたダンスダンス
トーナメントの結果だ。お前たち、互角で引き分けだったじゃない
か。だから今からその決定戦をするんだ」

「ああ、そう言えばそうでしたね」

とハヤテが頭上に当時の状況を浮かべる。

「でも、お嬢様。それを何故、今、此处でやる必要があるんですか
？」

「決まってるだろ。ハヤテがヒナギクよりダンスが得意だと言うの
を証明する為さ」

「私、ハヤテくんよりダンスが下手確定！？」

「文句を言う暇が有ったら早く位置に着け」

ヒナギクはナギを鬼の様な顔で睨んだ。

「むっ、何だその顔は！？」

「こんなバカバカしい事やってられないわ！帰る！」

そう言ってヒナギクが部屋を出て行こうとすると、

「逃げるのか、ヒナギク？」

ヒナギクの足が止まった。

「逃げるですって！？良いわ、やってやろうじゃない！」

ヒナギクは振り向き格好良くナギを指差した。

ナギの一言でヒナギクの闘争心に火が点いた様だ。

ヒナギクは筐体の踏み台に着いた。

「ハヤテも突っ立ってないで準備しろ」

「は、はい！」

ハヤテが位置に着き、ゲームは開始された。

で、五時間後の現在に至る訳である。

「なかなか決まらないわね」

「そうですね」

ハヤテは一瞬、ナギの方を顧みた。

ナギは椅子に座って気持ちよさそうに寝ている。

「お嬢様、寝ちゃいましたよ」

「えっ、ホントに！？」

ヒナギクがナギの方に顔を向ける。

その途端、ヒナギク側の画面にGame overの文字が。

「あ、僕勝ってしまいました」

「ちよっ、今のは無しよ！」

「もう一回やるんですか？」

「否、もう疲れたわ」

「五時間ぶっ続けでしたからね。そろそろ帰りますか？」

「ええ、そうするわ」

「それじゃあ、お嬢様をお部屋に運んできますので一寸待って下さい」

「送ってつてくれるの？」

「ええ、もう外も暗いですし」

窓の外を見ると、完全に暗くなっていた。

「何時！？」

ヒナギクは部屋に飾られている時計を見た。

時刻は午後10時をとくに過ぎている。

「もうこんな時間！？」

「かなり集中してましたからね」

よいしょっ！ とナギを背負うハヤテ。

（お嬢様、少し重くなったな）

「あ、私も付き合うわ」

「そうですか。じゃあ一緒に行きましょう」

二人は専用部屋を出てナギの部屋に移動した。

ハヤテはそこでナギをベッドに寝かせ、二人で部屋を出た。

そこへ「にゃー」とタマが現れた。

「うわっ、何でこんな所に虎がいるのよ！？」

ヒナギクは吃驚してハヤテの後ろに隠れた。

タマが「にゃー」と泣きながらヒナギクに近付いて顔を擦り付ける。

「きゃああああー！」

ヒナギクは悲鳴を上げて逃げ出した。

背後からタマが。更にその後ろにはタマを追うハヤテ。

「来ないでー！」

ヒナギクは必死で逃げて逃げて逃げ続け、玄関前の階段に辿り着くと駆け下りて行き、足を滑らせて転倒を始めた。

「ヒナギクさん！」

ハヤテが咄嗟に横に跳んで壁を蹴り、ヒナギクの前に着地すると支えた。しかし、バランスを崩して彼も一緒に転げ落ちてしまった。

「（俺知らねえ）」

タマは小声でそう言って去って行った。

「痛・・・大丈夫ですか？」

ハヤテの下敷きになっていたヒナギクは目を開けてそう訊ねた。

「えっ・・・ええー!？」

驚いたヒナギクは感嘆の声を上げた。

一体、何に驚いたと言っただろうか。

「ん・・・ん・・・」

目を開けたハヤテは、目の前にヒナギクを確認すると、顔を真っ青にして「出たー!」と叫んで気絶した。

「・・・・・・・・」

どう反応したら良いか解らないヒナギク。

彼女は取り敢えずハヤテの下から抜け出して立ち上がった。

(どう見てもこれ、僕だよ・・・)

目の前で横たわるハヤテを見下ろしながらヒナギクは思う。

どうやら、ハヤテはヒナギクになってしまったらしい。と言う事は、必然的に倒れているハヤテがヒナギクと言う事になる。

(と、取り敢えずベッドに寝かせて、マリアさんに事情を・・・)

そんな事を考えていると、グッドタイミングでマリアさん登場。

「あら、ヒナギクさん。今帰りで・・・って、ハヤテくん!？」

マリアがハヤテに駆け寄る。

「ヒナギクさん、ハヤテくんに一体何が遭ったんですか!？」

取り乱したマリアがヒナギクの肩を驚掴みにして訊ねる。

「ま、マリアさん、落ち着いて下さい!」

「え、ええ、そうね」

マリアはヒナギクの肩を解放して深呼吸した。

「で、何が遭ったんですか？」

ヒナギクは階段から落ちた拍子に二人の体が入れ替わってしまった事を話した。

「冗談・・・ですわよね？」

「いいえ、冗談なんかじゃありません!僕がハヤテなんです!」

と手で自分を示しながら必死に訴えるヒナギク。

「あ・・・」

その時、ヒナギクは自分の手で胸を触っている事に気付いて頬を赤らめた。

（これ、ヒナギクさんの胸。ホントに俎板だったんだ）

「さん、ヒナギクさん」

考え事をしていると、マリアの声が耳に聞こえてきた。

「えっ、はい？」

「どうやら頭の打ち所が相当悪かったみたいです。今日の所はひとまず泊まって、明日の朝、病院へ行って精密検査をしましょう」

マリアはそう言っと、ハヤテの体を重そうな顔で抱き抱えて彼の部屋へ運んで行った。

一人残されたヒナギクは、マリアの言った言葉について考えていた。

（頭の打ち所が悪かった。だから僕が自分をハヤテだと思い込んでいる・・・のか？）

ヒナギクは頭をぶんぶん振るって考えを吹き飛ばした。

（考えるのは止そう。明日になれば元に戻ってる筈、多分）

第02話：これは夢じゃない。結果は問題無し

翌朝、ヒナギクはハヤテの部屋で目を覚ました。

ヒナギクはベッドから出ると、徐に制服を脱いで掛けてある執事服を着た。

そして部屋を出て執事の仕事を始める。

玄関の靴を磨き、階段を掃除し、その他色々な場所の掃除を丁寧にこなす。

仕事が一段落付くと、彼女は未だトイレに行っていない事を思い出した。

「ヤバイ、漏れる」

思わずそう口にしてヒナギクはトイレに駆け込み、洋式便器の蓋と便座を開け、ズボンのチャックを下げた。

そこまではいつもやっている事だから問題は無かった。しかし・・・

「うわっ、穴が無い！」

ヒナギクは慌ててベルトを外し、ズボンを下ろした。

出て来たのはヒナギク愛用のスパッツ。

「スパッツ？」

（っ！）

何かに気付いたヒナギクは、恐る恐るスパッツの中に手を入れて股間を改める。

「なっ！？」

ヒナギクは思い切ってスパッツを完全に下げた。

股間には当然の事、男の一物はぶら下がってはいない。

（ま、まさかな・・・）

ヒナギクは徐に髪を掴んで前に持ってきた。

そこに在るのはピンク色の長い美髪。

「ヒナギクさんの体ですかこれ！？って、驚いている場合じゃなか

った」

ヒナギクは深呼吸をして冷静さを取り戻し、便座を下げて座った。
（そう言えば、ヒナギクさんはどうしてるんだろっ？僕になってるのかな）

ヒナギクは見た目がハヤテの彼女を想像した。

『何なのよこれ！？』

「キモ」

コンコン！

唐突に外からドアが叩かれて「入ってますか？」と言うマリアの
声が聞こえた。

ヒナギクはコンコンツとドアを叩き返してやる。

すると外の気配は消えた。

ヒナギクは尿を出し終わると、トイレトペーパーを巻き取って
股間を拭き、スパッツとズボンを着いて水を流し、ドアを開けて誰
も居ない事を確認すると直ぐに出てドアを閉め、電気を消して素早
くハヤテの部屋へ駆けつけた。

ベッドには寝間着姿のハヤテがやすやすと気持ちよさそうに眠っ
ている。

（流石に執事服は拙いよなあ）

ヒナギクは執事服を脱いで元の場所に掛けると、先刻脱ぎ捨てた
彼女の制服に着替えた。

それとほぼ同時にハヤテが目を覚ます。

ヒナギクはハヤテに顔を向けた。

「おはよう御座います、ヒナギクさん」

ヒナギクは笑みを浮かべてハヤテにそう言った。
するとハヤテの顔が真っ青になっていき、悲鳴を上げる。

「きゃあああああ！」

「お、落ち着いて下さい、ヒナギクさん！僕です、綾崎 颯です！」
が、しかし、ハヤテは落ち着く所か、余計に騒がしくなってしまう
った。

「来ないで、お化け！」

ハヤテは頭の下に在った枕を取ってヒナギクに投げ付けた。
バフッ！

ヒナギクの顔面に柔らかい枕が当たる。

その隙にハヤテは部屋の隅に移動していた。

（しょうがない）

ヒナギクは机の引き出しを開けて鏡を取り出すと、ハヤテの顔の前に出した。

まじまじと覗くハヤテ。

そこに映るのは、ハヤテの可愛い女顔。

「は、ハヤテくん！？どうして鏡の中に居るのよ!？」

「否、これに映ってるのはヒナギクさんなんですけど・・・」

「え？」

ヒナギクの一言で目を点にするハヤテ。

「一寸待って！と言う事は、私がハヤテくんだって事じゃない!どうなってんのよ!？」

流石生徒会長。呑み込みが早い。

「理由が解れば今頃、元に戻してますよ」

「・・・えっと、貴方はハヤテくん？」

「だから最初からそう言ってるじゃないですか」

「・・・」

ハヤテは言葉を失った。

「まあ、取り敢えずあれ着て下さい、ヒナギクさん」

言ってヒナギクはハヤテの執事服を指差した。

「解ったわ」

ハヤテは何の躊躇いも無く執事服を手にとった。

「見ないでよね」

ハヤテはヒナギクを睨んだ。

「それ、僕のですよ？」

「そ、そうだったわね」

ハヤテは堂々と寝巻きを脱いで執事服に着替えた。

「あら、少し暖かいわね」

「ああ、それは僕が癖で着たからですよ。気にしないで下さい」

「・・・悪いけど、気にさせて貰うわ」

「え？」

「この服を着たって事は、当然私の裸を見たって事よね？」

とハヤテが間合いを詰めて真剣な表情で見つめる。

「み、見てないですよ！と言うか突然こんな事が起こったから見る余裕なんて無かったです！」

「見る気はあつたんだ？」

「・・・」

ヒナギクは墓穴を掘った事を後悔した。こうなったら開き直ろう。
ヒナギクは正直に言う。

「ええ、まあ、少しだけ」

途端、ハヤテの顔が夕焼け色に染まった。

「あ、すみません、ヒナギクさん」

「良いわよ、謝らなくて。男の子ってのは皆そうなんですよ？」

「否、皆と言う訳では無いですが、年頃の男の子は大抵そうですね」

「ふーん」

ハヤテがヒナギクを細目で見る。

「何ですか？」

「別に。ハヤテくんもその中に入るのかなって思ってた」

「・・・」

「コンコン！」

部屋のドアが叩かれ「ハヤテくん、朝ですよ」とマリアが入ってくる。

「あ、おはよう御座います、マリアさん」

ヒナギクは笑顔で彼女を出迎えた。

「あら、ご一緒でしたの、ヒナギクさん？」

「（ハヤテくん）」

ハヤテがヒナギクの耳元で囁く。

「（マリアさんは私たちが入れ替わってる事は知らないの？）」

ヒナギクは夕べの事をハヤテに伝えた。

「（えっ、頭打ったかも知れないから病院へ行く！？マリアさんがそう言ったのね？）」

ハヤテの問いにヒナギクは頷いた。

「（そう。じゃあ行っておきましょう。入れ替わった原因が判るかも知れないし）」

「あの、お二人で何をこそしてるんです？」

「え、否、何もしてないです。それより早く行きましょう」

ヒナギクは否定しながら話しをはぐらかした。

「はあ、行くとどちらにですか？」

「忘れちゃったんですか、マリアさん？夕べ言ったじゃないですか。病院に行きましょうって」

ヒナギクの言葉に夕べの事を思い出すマリア。

「そう言えばそうでしたわね。それじゃあ行きましょうか。表のS Pの方たちに頼んで車を出して貰います」

言ってマリアは去って行った。

とある病院の待ち合い室。

二人はそこでMRIの検査結果を待っていた。

「綾崎さんと桂さん」

と診察室から看護師が出て来た。

二人は立ち上がって診察室に入る。

中では美人な女医さんが座って二人のカルテを見ていた。

（び、美人だ）

ヒナギクがその女医さんの美しさに頬を赤くすると、ハヤテが彼女の脇腹を小突いた。

ヒナギクは我を取り戻し、申し訳無さそうな顔をする。

「座って下さい」

女医さんが二人の事を見て言った。

二人は目の前に在る二つの丸い椅子に、それぞれ座った。

「お二人の検査結果ですが、特に異常はありません」

女医はそれだけ言うつと、二人のカルテを脇に避けた。

「戻って結構ですよ」

二人は席を立ち、会釈をすると診察室を出た。

「原因、解らなかつたわね」

「そうですね」

二人は同時に「はあ」と溜め息を吐いた。

そこへマリアが現れる。

「二人とも、結果はどうでしたか？」

「特に異常は見付からなかった、との事です」

「そう。それは良かったですわね」

マリアはニツコリ笑んだ。

「お会計の方は私の方でお支払いしておきますので、お二人はどうぞお先にお帰り下さい」

そう言つてマリアは会計窓口の方へ歩いて行つた。

「それじゃあ帰りましょうか、ヒナギクさん」

「・・・・・・」

「あの、ヒナギクさん？」

「えっ？」

「僕の話し聴いてました？」

「ゴメン、一寸考え事してた」

「考え事？」

「これからの事をね」

「これから？」

ハヤテは顔を顰めた。

「ハヤテくんってホント鈍いのね。今の私たちってどう言う状況？」

「どう言うつて、僕とヒナギクさんが入れ替わつてて・・・」

「そう。だからどうするかを考えてたの。それでね、結論なんだけど、私がハヤテくん^くでハヤテくん^がが私を演じる。これでどうかしら？」

「そうですね……。状況が状況ですからね。解りました。それで行きましょう」

「うん。それじゃあ早速二人っきりで練習ね」

「練習？」

「負け犬公園でやりましょう？」

言ってハヤテはヒナギクの手を掴んで歩き出した。

「え、ええ？ちよつ、ヒナギクさん、僕未だ答えてないですよ？」

「良いから良いから」

とヒナギクの回答を無視してハヤテは負け犬公園まで彼女を引きずって行った。

第03話：消えたヒナギク（前書き）

作中のハヤテが旧校舎で見ではいけなかった物については花菱美希の恋物語を^{レスストーリー}ご覧下さい。

第03話：消えたヒナギク

ハヤテとヒナギクが入れ替わって一週間が経った頃、白皇では要らぬ噂が立ち始めていた。

その事などつい知らないヒナギクは、Youtobeの部屋に来ていた。

真ん中のソファに花菱^{はなびし} 美希と向かい合って座っている。
「で、話して何？」

ヒナギクは目の前で真剣な顔をしている美希に訊ねた。
「単刀直入に言おう。ハヤ太くんとは付き合ってるの？」

「へ？」

意味が理解出来なかったヒナギクは変な声を上げた。

「最近、あんたとハヤ太くん、いつも一緒に居るでしょ？」

「ええ、居るわ。それがどうかしたの？」

「校内で噂が立ってるんだよ。ヒナとハヤ太くんが付き合ってるって」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

場を暫し沈黙が支配した。

「バカね。そんな訳無いじゃない」

と引き攣り笑むヒナギク。

「ハヤテくんとはただの友達よ。ト・モ・ダ・チ」

「そう。じゃあ、キスして」

その瞬間、ヒナギクの顔が青くなった。

「私しか愛していないと言う事を証明する為にキスして」

（な、何で女の子同士でキスなんか・・・って、まさか!?!）

この時、見た目がヒナギクのハヤテは思い出していた。自分が旧校舎で見えてはいけない物を見てしまっていた事を。

（し、しなきゃ駄目なのかな？キス・・・）

「ヒナ？」

「ご、ごめん、美希。キスだったわね」

ヒナギクは席を立つと、美希の隣に移動して座り、彼女の後頭部を押さえて唇を彼女に近付けて重ねた。

「ぶはっ」

ヒナギクが離すと、今度は美希が求めてきた。

互いの唇が再び重なった。

（最悪だ。僕の好きなヒナギクさんが汚れていく・・・）

「ぶはっ」

美希が口付けを辞めた。

「じゃ、私は行くから。ヒナも早くしないと授業に遅れるよ」

言って美希は部室を出て行った。

（花菱さん、良い匂いだっただなあ）

そう思い、頬を赤くするヒナギク。

（つて、何考えてんだ僕は！？）

ガチャ

部室のドアが開いてハヤテが入ってきた。

「ハヤテくん、こんな所に居たんだ。いくら捜しても見付からなかったからもしかしてと思って。で、こんな所で何やってるの？」

「キス魔に襲われてました」

「キス魔？まあ良いわ。教室戻りましょう？」

「はい」

二人は部室を出て教室に移動した。

「あれ、お嬢様は？」

教室に入るなり、ナギが居ない事に気付いたヒナギクはハヤテに訊ねた。

「そう言えば居ないわね。先刻まで居ただけど、何処行っちゃったのかしら？」

一寸捜してくるわね　ハヤテはそう言って教室を出た。

「待って下さい。僕も一緒に捜します」

とヒナギクが続いて廊下に出る。

「解ったわ。それじゃあ貴方は校外、私は校内を捜すわ」
「解りました」

そう返答したヒナギクはハヤテと別れてナギを捜し始めた。

それから30分が経過した頃、ヒナギクは一旦ハヤテと合流した。
「見付かった？」

「いいえ。これだけ捜して居ないとなると、もう家に帰ったのかも」
「でもあの娘、一人で大丈夫かしら？」

（心配だ・・・）

ナギが心配になってきたヒナギクは、ハヤテに言った。

「僕、お屋敷に行ってみます。もしかすると途中で遇えるかも知れませんし」

「解った、任せるわ」

ヒナギクは学校を跡にして三千院家のお屋敷に向かった。

その途中、何者かに銃口を突き付けられている金髪ツインテールの小さな少女を見掛けた。ナギだ。

ヒナギクは躊躇無く駆け、銃を持っている奴に「イーナー　ー　マ　ー　キー　ック！」とそれをお見舞いし・・・ようとしたが、執事パワ　ー　を持っていなかったヒナギクは技が発動せず、銃を持った奴に避けられて地面に突っ伏した。

「何だてめえは？」

銃を持った奴はヒナギクに銃口を向けた。

「俺の邪魔をすると言うのならお前から始末してやろう」

（この人もしかして！）

ヒナギクはすっと立ち上がって訊ねた。

「貴方、三千院家の遺産を狙う者？　だったら私が相手になるわ」

「お前、このチビの何なんだ？」

「執事です」

「否、執事は男だからな」

（そうだった。僕は今ヒナギクさんと言う立派な女の子だったんだ）

銃を持った奴に突っ込まれたヒナギクは少々落ち込んだ。

「と、兎に角、ナギに手を出したら私が許さないわ！掛かってきなさい！」

「あ、そ。じゃあ遠慮無く」

パン！

銃弾は躊躇う事無く放たれ、ヒナギクの太股を貫いた。

「うわっ！」

悲鳴を上げて倒れるヒナギク。

「お前、よく見たら別嬪べっぴんだな。俺の女になれ」

「こ、断ります」

「そうか。それじゃあ仕方がない」

銃を持った奴がそう言うと同時にヒナギクは意識を失った。

「お前、ヒナギクに何をしたんだ！？」

「何って、麻酔を撃っただけだ。そうだお前、あの執事に伝えろ。

この女を助けたければ一人で来いってな」

「ああ、そいつなら好きにして良いぞ。ライバルが減って好都合だ」

「血も涙も無えな、お前。まあ、兎に角そう言う訳だから頼むわ。

じゃあな」

銃を持った奴はそう言うのと、ヒナギクの体を抱えて路上に停めてある車に乗り込んで去って行った。

ナギは車のナンバーを覚えると、慌てて白皇に戻った。

「ハヤテー！」

教室に入るなり、ナギはハヤテに先程の事を話した。

「ええっ、本当ですかお嬢様！？」

驚いて素っ頓狂な声を上げるハヤテ。

「ああ。それとナンバーを覚えといた」

ナギはハヤテに覚えたナンバーを教えた。

「ヒナギクを助けに行っちゃってくれ」

「解りました、お嬢様！」
ハヤテはそう言っ、窓から飛び下りるとヒナギクの奪還に向かった。

ビッグ ト付近に在る倉庫の一角にヒナギクは監禁されていた。
辺りは完全に真っ暗で何も見えない。
「起きたか」

その声と共にヒナギクの視界が開かれた。
どうやら、アイマスクが何かで目を覆われていたらしい。

「ふがつ！」

ヒナギクは何か言おうとしたが、口をテープで塞がれている為に声が出せなかった。

（これ何とかなんないかなあ？）

とハヤテは後ろ手に縛られているロープと椅子の脚と足を縛っているロープを見て思った。

「おっと、悪い。何か言いたいんだな？」

目の前の覆面をした奴がそう言っ、口を塞いでいるテープをビリッと剥がした。

「貴方、一体何の目的で私を！？」

「何の目的、か。それはだな・・・」

そこで覆面は意味無く溜めて「教えてあげない」と言っ、

「ま、実を言っ、綾崎とか言っ、たか？あの執事を誘き出す為の餌だ」

言っ、ておきながら何故か教えている覆面。かなり愚かな奴だ。

（僕を誘き出す？っ、て事はヒナギクさんを誘き出す？っ、て事！？それだけは決してさせてはいけない！）

そう思っ、たが時既に遅し。倉庫の表には既にハヤテが居た。

（此処ね）

と扉を開けて中に入る。

「誰だ!？」

覆面が振り向いて銃を構える。

(け、拳銃ですって!?)

パン!

拳銃が放たれたと同時にハヤテ扉の陰に隠れた。

(こ、これじゃあ迂濶に近付けないじゃない!どうしろって言つたよ!?)

とその時、ハヤテの頭上に電球が。

(そうだわ!)

ハヤテは手を上に翳した。

(来て、正宗!)

心でそう念じる。が、しかし、正宗はやって来ない。

(そ、そうか。今の私はハヤテくんだもん。来るわけ無いじゃない)

「おい、出て来いよ、執事さん」

中からそう聞こえたが、ハヤテは出て行かない。

(こんな時はどうしたら良いのかしら?)

ハヤテはヒナギクの奪還方法を考える。

(そう言えば、ハヤテくんの体って丈夫よね。車に撥ねられようが爆発に巻き込まれようが無傷だった。なら銃弾も当たって平気だったりして)

とても危険な事を考えている元生徒会長。

「おい、いい加減に出て来ないとこの女の命は無えからな!」

(それは駄目!)

ハヤテは中に飛び込んだ。

「掛かったな!」

パン!

覆面の放った銃弾がハヤテの足に風穴を開けた。

「くっ!」

引き攣るハヤテ。

(一寸予想外)

「ヒナギクさん、それ僕のですよ！？いくら丈夫とは言え相手は拳銃！殺られるに決ってるじゃないですか！」

ヒナギクの突っ込みにハヤテは「そこ、一々突っ込まない！」と格好良く指を差して言った。

「お前、どう言う状況か解ってねえだろ？」

「へっ？」

覆面の言葉にハヤテは変な声を上げ、覆面の拳銃を見た。

「やばっ！」

ハヤテは辺りを見回してドラム缶を見付けるとその陰に隠れた。パアン！

同時に銃声。

（隠れて正解ね）

だがそれは間違いだった。

覆面はドラム缶の陰に隠れると予想してドラム缶を撃っていたのだった。

「う、嘘でしょ！？」

ドカーン！

ドラム缶が爆発し、ハヤテは吹っ飛ばされて壁に激突した。

「うっ！」

呻き声を上げて気絶し、ズルズルと壁から滑り落ちるハヤテ。

「ヒナギクさん！」

ヒナギクは叫んだが、ハヤテは目を覚まさない。

（どうすれば良いんだ？）

その時、何処からともなく、正宗が飛来してヒナギクを縛っているロープを全て切断した。

（こ、これは正宗！僕に使えと言うのか！？）

ヒナギクは目の前を浮遊している木刀に恐る恐る手を伸ばして掴んだ。

すると体の底から力湧き出てきた。

ヒナギクは覆面に向かって駆けた。

覆面はヒナギクの足音に気付いて振り向いた。

「なっ、いつの間に!？」

地面を蹴って空中に舞い上がるヒナギク。

間一髪、覆面はヒナギクの攻撃を避けた。

が、間髪を容れず、ヒナギクの正宗が覆面を襲う。

「うっ!」

額に直撃を受けた覆面は目を回してその場に倒れ気絶した。

ヒナギクは正宗を空中に放り投げ、ハヤテの下に駆けた。

「ヒナギクさん、しっかりして下さい! ヒナギクさん!」

と体を揺さぶったり頬を叩いたり。

「ん・・・んん?」

意識を取り戻したハヤテが目を開ける。

「ああ、ヒナギクさん。僕は一体何を?」

「え、今なんて?」

「あの、ヒナギクさん。どうしてそんなに驚いてるんです?」

「え、えええええ!？」

ハヤテの言葉に驚いたヒナギクは叫んだ。

「ヒナギクさん?」

第03話：消えたヒナギク（後書き）

突如起きたヒナギクのハヤテ化。彼女に一体何が遭ったのか？次回
はそれを解明する予定です。

第04話：ハヤテとヒナギクとヒナギクとハヤテ（前書き）

いきなり意味不明なタイトル。でも本文を読めば解るです。
因みにこれ、ハヤテ×ヒナギクのつもりです

第04話：ハヤテとヒナギクとヒナギクとハヤテ

見た目がハヤテのヒナギクがハヤテ化して一日が経った。
見た目がヒナギクのハヤテは一体何が起こったのか、未だ理解出来ずにいる。

その彼、いや彼女が自宅、つまり桂家のヒナギクの部屋のベッドで横になっていると、頭の中に声が聞こえてきた。

『来て』

「???」

ヒナギクは起き上がって辺りを見回したが、部屋には自分以外誰も居ない。

『こっちに来て』

「うわっ！」

突如ヒナギクを襲った頭痛に、彼女は頭を押さえ倒れて気を失った。

そして次に目を開けた時、ハヤテは辺り全体が真っ白な世界に居た。

「此処は？」

「エーテルワールドよ」

「え？」

ハヤテがその声に振り向くと、ヒナギクが立っていた。

「ヒナギクさん？」

ハヤテはそう問うと、自分の体を改めた。

上下両方とも普段着てる執事服と同じ物だ。

「あれ？」

「はい、鏡」

言ってヒナギクはハヤテに鏡を渡した。

ハヤテはそれを受け取って自分の顔を映した。

「戻ってる!？」

「この世界はね、精神だけが存在出来る世界なの。私たちは今、精神だけの状態だから、元の姿なのよ」

「どう言う事ですか、それ？」

「それは私が説明致そう」

とそこに現れたのは白服を着たボサボサ頭の男。頭上には金色の輪っかがあり、背中には翼が生えている。見たところ、エンジェルの様な気もするが・・・。

「誰なんですか、このボサボサ頭？」

グサツ！

ハヤテ曰くボサボサ頭の心に矢が突き刺さった。

「ボサボサ頭って言うな！」

とても気にしている様だった。

「まあ良い。私は天使だ」

「天使？」

「ああ。まあそれは置いて」

と自称天使は見えない何かを掴んで脇に避けた。

（置いてくんですか）

「先ずは君たちが入れ替わった原因から話そうか」

「原因、ですか」

「ああ。君たちが入れ替わった原因は・・・」

自称天使はそこで意味もなく一旦溜めて「私の単なるミスだ」と答えた。

「はい？」

「実はな、先程まで我々の世界と魔界との間で戦争が起きてたんだ。この戦争、最初は我々が有利だと思っていたんだが、どうやら向こうには最終兵器が隠されていたらしく、事態を重く見た我々は現世に居る君たちを使ってその戦争にケリを付けようと試みたんだ。結果、戦争は我々の勝利で幕を閉じたんだが、君たちを入れる時に一寸手違いが遭って、入れる体を間違えてしまったのだよ」

「はあ。それじゃあ、僕が二人になった理由は何なんですか？」

「簡単だよ。君たちの精神をオリジナルからコピーしたからだ」

「コピー？」

「クローン、と言うのは知ってるね？」

「そう言えば昔、ブタのクローンが誕生したとかそんな話題が有ったような」

「そ。言わば君はクローンなんだ」

「僕が、クローン？」

ハヤテは、頭の中が真っ白になった。

「あー、突拍子もない話して混乱してるみたいだね。まあ要するにね、現世からオリジナルを一時的に拝借するのに君たちを作って体に入れたって訳よ」

「・・・それは解りましたが、何故僕はヒナギクさんのままなんです？」

「それなんだがな、何故か君の事が抜き出せなかったんだ。どうやら、君とこの娘の体がシルバーコードで一つに繋がってしまったらしくてね」

「シルバーコード？」

「その事だ」

そう言って自称天使は、ハヤテの体から伸びる金色に輝く紐の様な物を指差した。

ハヤテはそれを見ると取り敢えず突っ込んだ。

「シルバーコードなのに金色なんですか？」

「そこは突っ込まないでくれたまえ！」

「え、突っ込んだらいけないかったんですか？」

「当然だ。それよりもう時間だ。現世に戻って貰おう」

「え、戻るって、ヒナギクさんはどうするんですか？」

「勿論一緒に戻るわよ」

「因みにこの娘は本物だ」

「えええええ！？」

ハヤテは驚いて素っ頓狂な声を上げた。

「さあ、戻り賜え。現世に」
パチン！

自称天使が指をスナップさせたその瞬間、二人は光りに包まれ、
現世へと降ろされた。

「・・・っ！」

（何だったんだ、今のは。夢？）

先程の現象を疑問に思ったヒナギクはそう思った。

「夢なんかじゃないわよ」

その言葉と共に、目の前にヒナギクの姿が浮かび上がった。紛ら
わしい。次からハヤテがヒナギクの時はヒナギクハヤテと呼ぶ事にしよ
う。

「うわっ、ヒナギクさん!？」

ヒナギクは驚き、飛び起きて後ろへ下がった。

「ちよっ、そんな驚く事無いでしょ!？」

「あ、すみません。と言うか、現実だったんですね」

「信じ難い事だけだね。それより私が留守の間、体には何もしてな
いわよね？」

とヒナギクがヒナギクを細目で見詰める。

ヒナギクは顔を引き攣らせながら「勿論何もしてないですよ」
と答えた。

「ハヤテくんって嘘を吐くのが下手なのね。思いつ切り引き攣って
るわよ？」

「ごめんなさい!」

ヒナギクはorz これをした。

「何をしたのか言って貰おうかしら」

そう言っヒナギクはヒナギクを睨み付けた。

殺気を感じたヒナギクが恐る恐る顔を上げると、恐怖で鳥肌が
立ってしまった。

「その、は、裸を見ました!」

「へ?」

ヒナギクは目を点にした。

「ですから、ヒナギクさんの裸を・・・」

「それだけ？」

「はい、それだけですよ？」

「貴方、私の裸をただけでビクビクしてたの？お風呂に入る時とか誰だつて裸になるでしょ。それともハヤテくんは服を着たまま風呂に入るって言うの？」

その問いにHヒナギクはヒナギクを不思議そうな目で見詰めた。

「何よその目？」

「・・・あの、怒らないんですか？」

「怒られる様な事したの？」

「いえ、してません」

「だったら堂々としてれば良いのよ。解った？」

「はい」

一方、三千院家お屋敷のハヤテの部屋。

こちらでもヒナギクの部屋と同様の事が起こっていた。

ベッドの上で足に包帯を巻いて顔を引き攣らせているHハヤテを

ヒナギク

ハヤテが問い質している。

「ヒナギクさん、これは一体どう言う事ですか!？」

「こ、これ？これはホラ、あれよ。虎に追い掛けられて助けて貰って一緒に転げ落ちた時に骨折したのよ」

「・・・ヒナギクさん、嘔吐くの下手ですね。顔引き攣ってますよ？」

「・・・」

沈黙するHハヤテ。恐らく、謝るか否かを考えているのだろう。

「ごめんなさい、ハヤテくん!」

迷った挙げ句、Hハヤテもorz これをした。

「どう言う事が話してくれますか？」

ヒナギクの時とは違い、優しく穏やかに接するハヤテ。

「け、拳銃で撃たれたのよ」

「拳銃？」

「この間、ハヤテくんが誘拐されたのよ。と言ってもクローンの方よ？それで私、助けに行つたのよ。そしたら相手が拳銃を持ってて、パアンって一発」

「これ僕の体ですよ！？」

「解ってるわ。ハヤテくんの体だから、拳銃の弾くらい跳ね返すんじゃないかって思つて」

「幾ら何でも拳銃相手じゃ無理ですよ！て言うか正宗は使わなかったんですか！？」

「召喚出来なかつたのよ」

「え、マジですか？」

「召喚出来たらこんな傷負わないわよ！て言うか、足に怪我をしたくらいで怒ってるんじゃないわよ！男ならそのくらい我慢しなさい！」

逆ギレされてしまった。

「ヒナギクさん、怒られたからつて逆ギレしないで下さい！」

「五月蠅いわね！何か文句あるの！？」

「・・・いえ、無いです」

口喧嘩に勝てそうも無かつたハヤテは思わずそう答えてしまつていた。

「それより、一つ訊きたい事があるんだけど」

「訊きたい事、ですか？」

「そう。あの虎、タマつて言つたかしら？」

「タマがどうかしたんですか？」

「喋つたのよ。人の言葉を」

「・・・」

Hハヤテの言葉を聴いたハヤテは言葉を失つた。

「そもそも虎つて喋れるのかしら？」

「否、普通は喋れませんから」

「じゃあ何であの虎は喋るのよ？」

「タマは特別なんですよ。て言うか僕の声で女の子口調辞めてくれませんか？」

「何だよ？」

「聞ってるだけで虫唾むしずが走るんです」
「なっ！？」

つつく

第05話：マジですか！？

学校が半日で終了した土曜日の放課後、ハヤテはYouTubeの部室に来ていた。

彼は花菱^{はなびし} 美希と向かい合うようにソファへ座っている。

「僕に話して何ですか、花菱さん？」

「単刀直入に言う。ヒナとは付き合ってるの？」

「え？」

「え、じゃない。こっちは真剣に訊いてるの。答えてくれない？」

ハヤテはその問いの回答に困った。

すると代わりにHハヤテが答える。

「付き合ってます」

『うわあっ、勝手に答えしないで下さいよヒナギクさん！てか付き合ってるって何ですか！？』

「ハヤ太くん、今何て？」

「ヒナギクさんとは付き合ってるって言ったんですよ？」

「なっ！？」

美希は驚いて固まった。

『い、良いんですかヒナギクさん？』

ハヤテが問うと、ハヤテの肉体からヒナギクが出てきた。

「良いのよ、美希には飽きてたし。ま、そう言う事だから後は宜しくね」

ヒナギクはそう言ってハヤテを肉体に押し込んだ。

「あの、花菱さん？」

「はっ！」

ハヤテの声に美希は気付いてこう言う。

「ハヤ太くん、今すぐヒナと別れて。ヒナはね、一年の時からずっと私と付き合ってるの。だから、ヒナを取らないで欲しいんだ」

とその時、部室のドアが開いてオリジナルのヒナギクが入ってきた

た。

「ハヤテくん、こんな所で何やってるのよ？ 帰るわよ」
言ってヒナギクはハヤテに鞆を差し出した。

「一寸、ヒナ」

「うん？」

「私を愛してるってのは嘘だったの？」

「え？」

訳の分らないヒナギクは目を点にした。

その彼女に、ハヤテが耳元で囁く。

「（実はですね、花菱さんにヒナギクさんと付き合ってるのかって訊かれました、つい乗りで肯定してしまったんですよ）」

「はあ!？」

目を丸くして驚いたヒナギクが素っ頓狂な声を上げた。

「で、どっちなの？」

と美希がヒナギクに迫る。

ヒナギクは引き攣り笑みを浮かべながら答える。

「も、勿論愛してるわよ？」

「じゃあキスして」

「・・・・・・」

「どうしたの、ヒナ？ 私の事愛してないの？」

「・・・わ、解ったわ」

ヒナギクは美希の後ろに手を回して唇を近付ける。

「って、この状況で出来る訳無いでしょ！」

「ヒナ？」

「行きましょう、ハヤテくん」

そう言ってヒナギクはハヤテの手を掴んで部屋を出た。

「責任取ってくれるわよね？」

「責任、って何のですか？」

「決まってるじゃない。貴方と私が付き合っていると美希に吐いた嘘の責任」

「あの、どうやって取れば良いんでしょうか？」

ハヤテの問いにヒナギクは顎に手を当てて考える。

「そうね・・・この際、嘘を本当にしちゃうってのはどうかしら？」

「それはつまり」「付き合うつて事よ」

ヒナギクが間髪を容れずに答えた。

「マジですか!？」

第06話：墓穴掘っちゃいました（前書き）

「この世界には言ってはいけない事がある第6話。お嬢様を怒らせるのもほどほどに」

第06話：墓穴掘っちゃいました

ヒナギクの提案で付き合う事になったハヤテ。
彼は今お屋敷の自室に居た。

コンコン

扉が叩かれマリアが入ってくる。

「ハヤテくん、ヒナギクさんがお見えになってますよ」

「ヒナギクさんが？」

ハヤテはどうしたのかと思いつつ、玄関へと移動した。

「どうしたんですか、こんな時間に？」

「暇だから来たのよ。それより時間ある？」

「ええ、もう今日の仕事は終わりましたんで一応」

「そう。それじゃこれから散歩にでも行かない？」

「え、今からですか？」

「嫌なの？」

「別にそう言う訳ではないんですが」

「じゃあ行こうよ」

ハヤテは時間を確認した。

現在23時10分。

「でももうこんな時間ですよ？それに、夜間はとても危険で」

そう言つと、ヒナギクが睨み付けてきた。

「あんた、私と散歩するのが嫌だつて言う訳！？」

ハヤテは顔を引き攣らせて「嫌じゃないです」と両手を左右に振りながら答えた。

「何だ、騒がしいと思ったらヒナギクが来てたのか」

そこに突然現れたパジャマ姿のナギお嬢様。

「ぬうおっ！？お嬢様、未だ起きてたんですか！？」

「何驚いているんだ、ハヤテ。て言うか何故ヒナギクが居るのだ？」

「何よ、悪い？」

その問いにナギは踵を返して欠伸をしながら答える。

「別に。お前が夜中にハヤテを散歩に連れて行こうと考えていなければ問題ない」

その言葉に二人は沈黙した。

「む、お前たち散歩に行くつもりだったのか？」

ナギが振り向いて訊ねる。

「そ、そんな事考えてないですよ！ね、ヒナギクさん？」

「そ、そうよ。何も考えてないわよ？」

二人は引き攣りながら口裏を合わせた。

「怪しい」

「ぜ、全然怪しくないわよ。ねえ？」

「ええ。ですからお嬢様はゆっくりお休み下さい」

（つて、僕は何で誤魔化しているんだろっ？素直に答えれば良いのに）

「そうか。信じて良いのかな？」

「ええ」

「よし、信じよう。最近、学校で要らん噂が立ってるからな。疑って悪かった。じゃ、お休み」

言ってナギは去って行く。

ハヤテはその背中に向かって「お休みなさい、お嬢様」と笑顔で見送り、完全に視界から消えた所で安堵の溜め息を吐いた。

「それじゃあ行きましようか、ヒナギクさん」

「うん」

ヒナギクは頷き、二人で屋敷の外に出た。

同じ頃、ナギは部屋の窓から外を眺めていた。

不意に、下を見ると、ハヤテとヒナギクが門に向かって歩いているのが見えた。

（なっ、あいつら！）

ナギはメラメラと燃える赤い炎を体に纏って二人を睨み付けた。

「????」

ハヤテは背中に殺気を感じた。

「どうしたの、ハヤテくん？」

「いえ、何でもありません」

（何なんだ、一体？）

気になったハヤテは殺気が飛んでくるナギの部屋を見た。

「お、お嬢様！？」

「え？」

ヒナギクがハヤテの視線の先を追う。

「ちよっ、ナギが燃えてるわよ！？」

「いえ、あれは激怒のオーラですよ。しかし一体何故？」

「ハヤテー！」

激怒モードのナギが叫び、部屋を飛び出し、屋敷を抜けて二人の下にやって来た。

「どう言う事だ貴様！？」

「どう言うつて言われましても・・・」

「ナギ、取り敢えず落ち着いてくれる？」

「五月蠅い！」

「・・・・・・・・」

沈黙するヒナギク。

「ハヤテ、これがどう言う事が判ってるのか？貴様はあの日、私に告白したよな？その時私は二股は絶対しないとお前に約束させた筈だ。なのに何だこれは！？デートか、デートなのか！？」

「あの、お嬢様？」

「む？」

「何に怒ってらっしゃるのかは知りませんが、僕はお嬢様に告白した事なんてありませんよ？」

「何？」

「もしかしてお嬢様はあの日の事をそんな風に思っていたんですか？そんな勘違いっ」

とハヤテは言い掛けて思い出した。これは言うてはいけない事だ、

と。しかし時既に遅し。ナギが問い質していた。

「勘違いとは何だ？」

「え、勘違い？何の事ですか？」

「とぼけるな！お前は今、私への告白は勘違いだと言ったじゃないか！それなら本当はどう言う意味で言ったんだ！？」

借金返済の為の身代金目的の誘拐目的で言った、とは決して言えないハヤテである。

「どうした、言えないのか？話しによれば許してやらない事も無いぞ、ん？」

「身代金です。お嬢様を誘拐して身代金を要求するつもりで言いました」

正直に言っている自分がいた。

「なっ、何だとお！？」

その時、ナギがキレたのは確実だろう。

墓穴を掘ったハヤテは後退りを始める。

「ハーヤーテー！」

ナギは懷からロケットランチャーを取り出してハヤテに放った。

「お前なんか死んでしまえ！」

その怒鳴り声と共にミサイルがハヤテ目掛けて飛んでくる。

ドカーン！

ミサイルが爆発。爆風によりハヤテはヒナギクを巻き込んで敷地の外へ吹き飛ばされた。

「何で私まで！？」

「ヒナギクさん、僕に掴まって下さい！」

「そんな事言われても空中じゃ無理よ！」

そして二人は為す術も無く負け犬公園の砂場に墜落した。

第07話：温泉に行こう。場所は三千院家の敷地内（前書き）

6話の続きです。

第07話：温泉に行こう。場所は三千院家の敷地内

スポンッ！

ハヤテは擬音と共に砂の中から抜け出した。横を見ると、ヒナギクが頭から埋まっている。

「ヒナギクさん、大丈夫ですか！？」

スポンッ！

ヒナギクは砂の中から抜け出した。

「何とかね。それよりハヤテくんも大変ね。あんな娘が主人なんて」「いつもの事ですよ」

と苦笑するハヤテ。

「ハヤテくん、いつもあんな事されてるの？」

「そりゃもう色々」と

「死んじゃうんじゃ？」

「僕は丈夫だから平気です」

「あ、そ。て言うか、ハヤテくん真っ黒よ」

そう言つてクスクス笑うヒナギク。

「そう言うヒナギクさんも真っ黒ですよ？」

「え、嘘！？」

ヒナギクは辺りを見回し、公衆トイレを見付けるとそこに入って鏡を覗き込んだ。

煤だらけで真っ黒の自分が映っている。

（これはお風呂に入るしかないわね）

ヒナギクはトイレから出ると、ハヤテの下に戻った。

「ハヤテくん、今から温泉行かない？」

「良いですね、温泉。あ、でも僕、男だし」

「誰が一緒に入るなんて言ったのよ！バツカじゃないの！？」

「・・・ですよね」

その言葉に頬を赤くして訊ねるヒナギク。

「は、入りたかったの？」

「そ、そんな事ありませんよ！僕はただ、男だから温泉では別々になつてしまいますね、と言いたかったただけで！」

「ふうん・・・」

ヒナギクがハヤテを細目で見る。

「何ですかその目は！？」

「嘘吐くの下手ね。本当は一緒に入りたいんでしょう？」

「え、良いんですか？」

「駄目よ」

「期待させないで下さいよ！」

ヒナギクはクスクスと笑った。

「何が面白いんですか！？」

「え、だって、アハハ」

「ああ、何と無く解りましたよ。僕の事からかつてるんですね、ヒナギクさん」

「ごめんごめん、許して」

「許しますよ。それより何処の温泉行くんですか？」

「ハヤテくんは何処が良い？」

「そうですね・・・あそこはどうでしょう？」

ハヤテは公園入り口の向こう側に見える古びた建物を指差した。

暖簾のれんには「湯」と書かれている。

「銭湯は確か、タオルとか持っていないと入れなかった気がするけど」

「貸して貰えるんじゃないんですか？」

「甘いわね。温泉なら貸して貰えるだろうけど、銭湯よ？銭湯って言うのは」「じゃあ辞めましょう」

ヒナギクが言い掛けた所でハヤテが掻き消した。

「辞めるの？」

「はい。だって、僕たち何も持ってないじゃないですか」

「そうね。あ、じゃあ家のお風呂使っ？」

「え、でも・・・」

「遠慮しないの」

そう言ってヒナギクはハヤテを自宅へと連れて行く。

「ただいま」

自宅にハヤテを連れ帰ったヒナギクは家の者にそう言った。
するとヒナギクの義母が「おかえり」と奥から出て来た。

「あら嫌だ、真っ黒じゃないの」

「色々と遭ったのよ」

「色々って、男の子と遊んだだけでそんな真っ黒になるの？どんな遊びしてたのかしらね」

「否、別に遊んでたからこうなった訳じゃなくて」

「・・・まあ良いわ。二人とも、お風呂入っちゃいなさい。一緒に一寸待って！私、女の子よ！？」

「だから何なの？と言うか、そもそも泥だらけで家の中に居られないのよ。解ったらさっさと入っちゃって頂戴」

義母はそう言つと奥へと去って行った。

ヒナギクが「え、一寸おかっ」と手を伸ばし、肩を竦める。

「はあ」

溜め息を吐いたヒナギクは、ハヤテを顧みて一緒に風呂に入つた所を妄想する。

「そ、そんなの絶対無理よ！」

ハヤテは叫んだヒナギクを疑問視する。

「????」

「抗議してくる！」

ヒナギクはそう言つて奥へと行くと、悲しそうな顔をして戻ってきた。

どうやら、抗議は失敗に終わった様である。

「あの、何言われたか知りませんが、我慢して入りましようよ？」

「嫌よ、それだけは」

「そうですか。仕方がありません。三千院家の発電所に温泉があるのでそこに行きましょう」

「はあ！？何で発電所に温泉があるのよ！？」

ハヤテの言葉にヒナギクは思わずそう突っ込んだ。

「知りませんよ。まあ、兎に角行きましょう」

「解ったわ。一寸待ってて」

ヒナギクはそう言うのと、着替えとお風呂セット一式を持ってきた。

「はい、ハヤテくんの分」

「有り難う御座います、ヒナギクさん」

ハヤテは自分の分のお風呂セットを受け取り笑みを浮かべて礼を言う。

「それじゃあ行きましょうか」

「うん」

ヒナギクは頷くと、二人で桂家を出て三千院家の発電所内にある温泉施設に向かった。

第07話：温泉に行こう。場所は三千院家の敷地内（後書き）

次回に続きます

第08話：例え何が遭っても女の子の裸はタブー（前書き）

女の子の裸は駄目^{タブー}な第8話。

「ハヤテくん、女の子の裸体だけは見ちゃいけません。by・マリ
ア」

第08話：例え何が遭っても女の子の裸はタブー

三千院家の敷地内にある発電所。

ハヤテとヒナギクはその中を歩いていった。

「着きましたよ、ヒナギクさん」

そう言つてハヤテが温泉施設っぽい部屋を差し示した。

ヒナギクは徐に扉に手を掛けスライドさせて中に入った。

「なっ、いきなり脱衣所なの!？」

ヒナギクはいきなり視界に飛び込んできたものに驚いた。

「ええ、お嬢様の私物ですから」

「成る程ね・・・って、何で入ってくるのよ？」

「????」

ハヤテは疑問の表情でヒナギクを見つめる。

「ハヤテくん、脱衣所って何する所？」

「何って、裸に・・・っ!」

ハヤテは途中まで言い掛けて気付いた。

「すみません、直ぐ出ます!」

ハヤテは頬を赤らめ慌てて脱衣所を出て行った。

ヒナギクは適当にロッカーを選ぶと、服を脱ぎ、タオルと石鹸を持って大浴場に入った。

（あら？）

白い湯気の向こうに、何かのシルエットが見えた。

（先客かしら？ひょっとしたらナギかマリアさんかも）

そう思い込むと、ヒナギクはシャワー浴びて体を洗い、湯船に浸かった。

「お、誰だ？」

渋い声と共にシルエットが振り向く。

（嫌だ、男!？）

ヒナギクは顔を赤らめると慌てて湯船から上がり、脱衣所に飛び

出し、扉を開けて脱衣所の外に居るハヤテと面会する。

「何で中に男が居るのよ!？」

「知りませんよ、そんな事。それより服」

「えっ？」

ヒナギクは自分の体を改めた。

「ハヤテくんのバカ!」

言ってヒナギクは扉を思いっ切り閉めた。

(って、私ってバカだわ。中には男の人が)

ヒナギクは大浴場の方を振り向いた。

すると人間ではない白い生き物が「あー、気持よかった」と二足歩行をしながら出て来た。

「何で虎が喋ってんのよ!？しかも二足歩行してるし!」

ヒナギクが思わず突っ込むと、その虎は慌てて四足になって「にやー」と鳴いた。

(に、にやー?)

「にやー」

虎がそう鳴いてヒナギクに近付き、匂いを嗅ぐ。

ヒナギクは恐怖で何も出来ずに固まった。

虎がペロリとヒナギクの太股ふとももを舐める。

その行為にヒナギクは悲鳴を上げた。

「きゃああああ!」

すると勢いよく扉が開いてハヤテが入ってきた。

「ハ、ハヤテくん!」

ヒナギクはハヤテに抱き付いた。

「一体どうしたんですか？」

ハヤテが訊ねると、虎が鳴いて顔を見せた。

「タマじゃないか。お前、またヒナギクさんに何かしたのか？」

「またとは何だ、またとは!？」

そう言くとタマは慌てて口を塞いだ。

「ま、また喋った・・・」

ヒナギクはそう言い残して気絶した。

「うわっ、一寸ヒナギクさん！？起きて下さいよ！」
しかしヒナギクは起きなかった。

「タマ、お前にはお仕置きと言う物が必要か？」

そう言つてハヤテが目を赤く光らせると、タマがビビって顔を引き攣らせる。

「か、勘弁してくれよ」

しかしハヤテは問答無用でタマを壁まで追い込んで隠し持っていた手裏剣を投た。

放たれたそれは、タマの頬を掠めて浅い傷を作り、後ろの壁に突き刺さつた。

「危ねえじゃねえか！死んだらどうしてくれんだ！？」

「知りませんよ」

「あんた薄情つすね」

「ん・・・うん・・・？」

ヒナギクが気が付き、目を開けた。

「気が付きましたか、ヒナギクさん？」

ハヤテが問うと、ヒナギクは自分が今置かれてる状況を確認し、慌てて離れてハヤテの頬を引っ叩いた。

パシンッ！

辺りに音が気持よく木霊する。

「最っ低！」

言つてヒナギクはハヤテを脱衣所から追い出して扉を閉めた。

タマの視線がヒナギクに注がれる。

ヒナギクは恐る恐るタマの方を向いた。

「きゃああああ！」

悲鳴を上げて扉を開き、ハヤテに抱き付くヒナギク。

（やれやれ）

そう思つたハヤテは、ヒナギクを残して脱衣所に入り、タマに向かってこう言つた。

「おい、タマ。怖がってるから出て行ってくれないか？」

「イ、イエッサー！」

タマは元気よく返事をして発電施設を跡にした。

ハヤテはヒナギクの方を向いて「もう大丈夫ですよ」と言った。

「あ」

つい裸を見てしまったハヤテ。

ヒナギクは正宗を手にもその彼を睨み付けた。

「ハーヤーテークーン！」

「すみませんヒナギクさん、事故なんです！」

「問答無用よ！」

バシッ！

ヒナギクは正宗をハヤテに叩き付けた。

ハヤテはその場に倒れ、ピクピクと痙攣を起こしながら気絶をした。

第08話：例え何が遭っても女の子の裸はタブー（後書き）

やはりラブコメで温泉と言えば裸はお約束ですよ。

良い物見れてとても羨ましいです、ハヤテくん。

てな訳で次回は未定です。何しろネタが無いので。

つか、最近ボケが酷くて携帯で書いた時に「を」に直すのを忘れる。アルツハイマーにでもなったか？

第09話：新たな人生の幕開け（前書き）

執事はクビになっても執事を続ける第9話。

「ハヤテくん、私の家で執事をやって頂戴。by・ヒナギク」

第09話：新たな人生の幕開け

「お前はクビだー！」

突如、ナギお嬢様にクビを言い渡されたハヤテ。

全てを失い、途方に暮れながら、彼は負け犬公園のベンチに座っていた。

「あら、ハヤテくんじゃない」

そこに現れたのはビニール袋を提げたヒナギク。
買い物帰りの様だ。

「ヒナギクさーん！」

ハヤテはヒナギクの胸元で泣き出した。

「えっ、一寸、ハヤテくん！？」

ハヤテの突然の行動に戸惑うヒナギク。

「聴いて下さい。僕、お嬢様に執事をクビにされたんです。それで、行く当ても住む場所も全て失いました。僕は一体、どうしたら良いんでしょうか？」

「ど、どうしたらって、私に訊かれても判らないわ。それは災難だったわねとしか言えないし」

「うわぁー・・・！」

ハヤテは更に泣いた。

「ご、ごめん。取り敢えず、家に来ない？ 帰る場所無いんでしょ？」
そう言ってヒナギクはハヤテを自宅に招いた。

「で、何でクビにされたのよ？」

ヒナギクは自室の勉強机の椅子に腰掛けるとそう訊ねた。

ハヤテはヒナギクのベッドに腰掛けながら答える。

「実は」

事の発端は今から四時間前。

ハヤテがお屋敷で庭の掃除をしていると、ナギが「ハヤテー！」と叫んだ。

ハヤテは掃除を中断して直ぐにお嬢様の部屋に移動した。

「お嬢様、どうかなさいましたか？」

「単刀直入に言う。お前、ヒナギクと付き合っているのか？」

「何故訊くんです？」

「ああ？それは、学校でお前たちが付き合っていると噂が立つて
るからな。確認の為だ」

「はい、付き合ってますよ」

「そうか、付き合っているのだな。って、何！？」

ナギは驚き常人には真似出来ないリアクションを取る。

「貴様は何を考えておるのだ！？」

「何って、四六時中ヒナギクさんの事を考えながら仕事をしています
が」

「ふっ、そんなんで執事の仕事が務まるか。お前、暫く執事の仕事を
を休め」

「え？」

「良いから休め」

「でも」

「そうか。お前は主人の言う事が聴けぬと言うのだな。ならばお前
はクビだー！」

てな事があつて、現在に至る。

「成る程。それは災難だったわね」

その言葉にハヤテは沈黙した。

「どうしたの？」

「ヒナギクさん、もう一寸言葉を考えてくれますか？」

「んー・・・」

ヒナギクは唸りながら言葉を考えた。

「ハヤテくん、もし良かったら、私の執事にならない？」

「へ？」

ハヤテは目を点にした。

「僕が、ヒナギクさんの執事ですか？」

「あ、別に良いのよ？そんなのやらなくて。お姉ちゃんがだだをこねてるだけだから」

「桂先生が？」

「そうなのよ。実はね」

とヒナギクは語り始めた。

さくじつ

昨日、ヒナギクが三千院家の温泉施設から自宅に帰ると、雪路が酒に吞まれて横たわっていた。

「お姉ちゃん、またこんなになるまで飲んだのね」

「お帰りヒナ。はい、これ」

そう言つて雪路は丸めた紙をヒナギクに投げた。

「何これ？」

受け取ったヒナギクは紙玉を開いた。

「せ、請求書！？」

と驚いて目を真ん丸にするヒナギク。

彼女が見ているのは酒屋の請求書だった。

請求金額は軽く100,000を超している。

ヒナギクは部屋を見渡した。

辺りには外国製の高級ワインやビール等の空ビンが転がっている。

「これを私に払えと？」

「うん、お願いねえ！」

雪路はそう言い残して眠ってしまった。

ヒナギクは目を赤く光らせ、殺気を放って怒りを露にした。

雪路は危険を察知して目を覚ました。

「お姉ちゃん！」

とヒナギクは正宗を召喚して襲い掛かる。

「今日と言つ今日は絶対許さないんだから！」

「うわあっ！」

雪路は間一髪避け、傍らに置いてあった竹刀を手にして応戦する。
カッ！

木刀と竹刀がぶつかり合い、音を立てる。

「少し落ち着きなさい、ヴィルヘルミナ・カルメル！」

「うっさいわね！^{ちょうし}弔詞の詠み手が悪いのよ！？」

両者は一旦引き、接近する。

カッ！

雪路の手から竹刀が放れ、宙に舞う。

「ふんっ」

雪路は飛び上がって掴もうとするが、既の所でヒナギクが奪取した。
た。

「私の勝ちね、マージョリー・ドー」

「はっ、まだよ！」

雪路はそう言ってスター状態になり、ヒナギクに体当たりをした。
「えっ？」

その瞬間、天と地が逆さになり、ヒナギクは床に頭をぶつけた。

「見たか、私の強さ！」

「隙あり！」

勝利のポーズを取って油断している雪路にヒナギクは正宗で足払いを掛ける。

「うわっ！」

雪路はバランスを崩して仰向けに倒れた。

ヒナギクは立ち上がり、雪路の腹に片足を乗せ見下ろした。

「さてお姉ちゃん。どうしてくれようかしら？」

「ひ、ヒナ、お願いだからそれだけはやめて！」

「それって何よ？」

「え、違うの？」

「違うわよ。私が考えてるのはお姉ちゃんの管理方法」

そう言ってヒナギクは頭の中で試行錯誤する。

「決めたわ。執事を雇う」

「執事？」

「そう。執事を雇ってお酒を飲まない様にお姉ちゃんの事を見張って貰うの。言ってみれば、お姉ちゃんのお世話係かしら」

「嫌よ。それだけは勘弁して」

「駄目」

ヒナギクはそう言うと、自室へと移動してベッドに潜り込んだ。

「　　と言つ訳なのよ」

昨晚の出来事を明かしたヒナギクは「やってくれるかしら？」とハヤテに訊ねる。

「お給料は出るんですか？」

「勿論出すわよ。少ないけど」

「解りました。引き受けましょう」

「ホントに？」

「勿論です」

「そう。じゃあ、今日からお願いね」

「畏まりました。で、最初は何をやれば良いんですか？」

「そうねえ・・・」

ヒナギクは手を顎に当てて視線を上により考える。

「買い物行ってきたくれる？お金は渡すから」

そう言つてヒナギクはお財布を机の引き出しから取り出してハヤテに渡した。

「晩ご飯のおかずなんだけど、適当に買ってきてくれれば良いから」
「はあ」

ハヤテは素っ気なく返事をする、立ち上がった。

「それじゃあ、行ってきます」

そう言つて部屋を出て行くハヤテ。

こうして、ハヤテの新たな人生が幕を開けた。

第10話：嘘を吐いてもろくな事は無い（前書き）

嘘を吐いたら大変な事になる第10話。

「嘘吐きは泥棒の始まりですよ、先生。by・ハヤテ」

第10話：嘘を吐いてもろくな事は無い

朝、ヒナギクはハヤテを起こしていた。

「ハヤテくん、起きなさいってば」

ヒナギクに体を揺さぶられて薄目を開けるハヤテ。

「やっと起きたわね。全く、執事が主に起こされてどうするのよ？」

「あーっ、そうでした！」

ハヤテは慌てて起き上がり、執事服に着替え、トイレに行って用を足し、洗面所に移動して洗顔を済ませ、キッチンに移って朝食の支度をする。

「あ、ハヤテくん。朝食ならもう出来てるから」

「え、そうなんですか？」

「ほら」

ヒナギクはリビングにある食卓の上に並べられた朝食を示した。そこにあるのは、お屋敷では食べた事の無い、庶民的な料理である。

「これ、もしかしてヒナギクさんが？」

「他に誰が居るって言うのよ？」

「桂先生」

ヒナギクは溜め息を吐いて肩を竦めた。

「あのお姉ちゃんが作る訳無いでしょ？」

「ですよ。それはそうと、昨日、帰ってきませんでしたね」

「そう言えばそうね。何処行っただのかしら」

「僕、一寸捜してきますね」

ハヤテがそう言って外へ出ようとすると、ヒナギクが引き留めた。

「良いわよ、お姉ちゃんなんか。それより、早く朝食済ませちゃいましょ？」

「え、でも」

「ふーん、ハヤテくんは私の言う事が聞けないんだ？」

そう言ってヒナギクはハヤテを睨んだ。

（こ、怖い・・・）

そう思ったハヤテは仕方なくリビングに移動し席に着いた。
その後が続いてヒナギクもやって来て席に着く。

「いただきます」

とハヤテは置いてあつた箸を取ってヒナギクの手料理を食べ始める。

「美味しいですね、ヒナギクさんの手料理」

「当然よ。私がハヤテくんの為に心を込めて作ったんだから。だから、ちゃんと味わって食べなさい？」

とその時、ハヤテの顔が引き攣った。

「どうしたの？」

（こ、この野菜炒め、塩とお砂糖を間違えてる。なんて言ったらどうなるだろう？）

ハヤテはそう思い、実際にそう言った時の彼女のリアクションを想像した。

「ヒナギクさん。この野菜炒め、味付け間違えてますよ」

「そんな事無いわよ」

「でも、何か甘い様な」

「ふーん。ハヤテくんは私の腕が悪いって言うの？」

そう言って正宗を手にするヒナギク。

「そ、そんな事言つてませんよ！」

「問答無用！」

ヒナギクはハヤテに襲い掛かった。

（なんて事になりかねない）

そう思ったハヤテは「何でも無いですよ？」と作り笑顔で答える。

（この顔、明らかに何か遭ったわね）

と気付いたヒナギクは、自分の味見した。

白米に問題は無い。

味噌汁にも無い。

残るは肉と野菜炒め。

ヒナギクは恐る恐る肉に手を出した。
クリア。

と言う事は野菜炒め。

ヒナギクは唾を飲み、野菜炒めを口にした。

(っ！？)

ヒナギクはお砂糖の甘味に顔を引き攣らせ「こんなの食えるかー
！」と親父の卓袱台返しちゃぶだいの如く、テーブルを引っくり返した。

「ひ、ヒナギクさん！？」

ハヤテは驚いて椅子から立ち上がり少し退いた。

(どうして、どうしてハヤテくんと居るところなるの？私って呪われてるのかしら？否、逆ね。ハヤテくんが呪われてるのよ、屹度)
勝手にそう解釈したヒナギクはハヤテを睨んだ。

あながち間違っちゃいないが・・・。

(な、何ですかこの人？滅茶苦茶怒ってる様な・・・)

「私が味付けを間違えたの、あなたの所為なんだからね！」

「えっ、何で！？」

「あなたが呪われてるからよ！」

そう言って正宗を召喚し、襲い掛かるヒナギク。

「これでああなたの呪いを祓ってあげるわ」

「ちよっ、辞めて下さい！」

ハヤテはそう言いながら攻撃を素早く回避。

「一寸、何で避けるのよ！？」

「だって僕、避けなきゃ死にますから！」

「それは試してみたいわね。元三千院家の執事がどのくらい丈夫なのか興味があるわ」

「そうですか。では仕方ありません」

言ってハヤテは真剣な顔になり、両手に気弾を作り出した。

「これはこの間ある人物に伝授して貰った、僕の新たな必殺技です
！」

するとそこへ、雪路がやって来た。

「二人とも、楽しそうじゃない」

その言葉にヒナギクは気付き、雪路の方を向く。

「おかえり、お姉ちゃん。今度から家で雇う事になった執事兼お姉ちゃんのお世話係のハヤテくんよ」

とハヤテを紹介するヒナギク。

ハヤテは気弾を消失させると、雪路の方を向いて「宜しく願います」と笑顔で頭を下げた。

「一寸待つて。どう言う事？綾崎くんは確か、三千院家の執事じゃ・・」

「その執事クビにされたから拾ったのよ」

「ふうん。それじゃあ早速買い物頼んじゃおうかな。酒^{さけ}買ってきて」

「鮭^{サケ}ですね？ダッシュで行ってきます！」

ハヤテはそう言うてダッシュで駅前の24時間営業のスーパーへ行き、鮭を買ってダッシュで戻ってきた。

「買ってきましたよ、鮭」

とハヤテは雪路に渡した。

「そうそう、これが食べたかったのよ。って、違ーう！私が言ったのは酒、お酒の事よ！」

「ハヤテくん、ナイスボケよ」

と笑みを浮かべ、親指を突き立てるヒナギク。

「そこっ、褒めないで突っ込みなさいよ！」

「嫌よ」

「一寸あんた、私の味方じゃないの!？」

「はあ？何で私がお姉ちゃんの味方をしなきゃいけない訳？」

「なんですって!？」

雪路は傍らに在った竹刀を手にした。

「私を買ったらあんたは私の奴隷！良いわね!？」

そう言うて格好良く竹刀でヒナギクを指す雪路。

「味方から格下がってませんか!？」

と突っ込むのは水色頭の少年。

「水色頭の少年って何だよストーリーテラー!？」

「……………」

辺りはシーンと静まり返った。

「あの、ハヤテくん？誰に突っ込んでるのは知らないけど、それはあなたの事よ」

「……解ってますよ、そのぐらい」

と可哀想な者を見るような目で見詰めるハヤテ。

「……………」

ヒナギクは沈黙した。

「所で、桂先生は今まで、何処で何をしてたんです？」

いきなり話しを振られ、雪路は戸惑う。

「えっと……」

(流石に言える訳無いよね。徹夜で麻雀やってたなんて)

「じ、実はね、彼氏の家に泊まってたのよ」

その言葉にヒナギクが眉毛をピクツと動かし細目で雪路を見ながらこう言う。

「へえー、お姉ちゃんに彼氏居たんだ」

「何よその顔は!？」

「いや、お姉ちゃんの彼氏さんも大変だなあって」

「どう言う意味よ、それ？」

「お姉ちゃん、お金無くなると直ぐに人にたかるから、お姉ちゃんの相手をする彼氏さんも大変だなって」

その言葉に雪路は引き攣る。

(い、言わなきゃよかった)

「あ、そつだ。今度連れて来てよ。お姉ちゃんの彼氏」
「えっ？」

雪路は目を点にした。

「一度、どんな顔か見てみたいから」

「う、うん。良いけど……」

（はっ、何約束してるのよ雪路。そんな約束、守れる訳無いじゃない）

「それじゃあハヤテくん、お部屋片付けましょう？」

言ってヒナギクが引っくり返したテーブルを戻し、ハヤテが散らばった皿や料理を片付け始める。

「お姉ちゃんもボーツとしてないで手伝ってよね。って、もうこんな時間！？」

ヒナギクは作業を辞め、制服を着用しに自室へ移動した。

そして学校へ行く支度が終わると、玄関に移動してハヤテを呼ぶ。
「ハヤテくん、早くしないと遅刻するわよ」

「あ、そうですね。それじゃあ桂先生。部屋のお掃除頼みますね」
ハヤテはそう言って自室に行き、鞆を持って玄関に移動する。

「行きましようか、ヒナギクさん」

靴を履き、ドアを開けてそう言う。

ヒナギクは「うん」と頷き、靴を履いて二人で家を出て行った。

「えっ、一寸！？私が掃除すんの！？つか私も学校行かなきゃいけないんだけど！」

雪路はそう言ったが、二人が戻ってくる事は無かった。

第10話：嘘を吐いてもろくな事は無い（後書き）

次回から新章に入ります

第11話：綾崎ハヤテ、喧嘩を買う（前書き）

商店街の不良共を熨てはいけない第11話。

「ヒナギクさんの代わりに僕がやります。by・ハヤテ」

第11話：綾崎ハヤテ、喧嘩を買う

人々が寝静まった真夜中の練馬区。

商店街では、一般人に迷惑を掛けたがる連中が、屯たむろしていた。

そんな中を、ヒナギクが一人で歩いていると、連中が近付いてきた。

「君、俺たちに一寸付き合ってくれないかな？」

ヒナギクは連中のツラを拝むと、連中を無視し、

（関わっちゃ駄目よ、ヒナギク）

と自分にそう言い聞かせて去って行く。

「嬢ちゃん、シカトは無いんじゃない？」

連中の一人がそう言ったが、彼女は一切耳を傾けない。

「聴けよてめえ！」

別の一人がそう言って、ヒナギクの肩を掴んだ。

ヒナギクはそいつの手を払い、丸でゴミを払うかの様に肩を叩いた。

「喧嘩売ってんのかてめえ!？」

肩から手を払われた男は彼女の行為にキレて怒鳴り付けた。

しかしヒナギクは無視する。

すると男が「シカトすんじゃないねえ!」とヒナギクに殴り掛かる。

「っ!？」

それに気付いたヒナギクは咄嗟にジャンプしてかわした。

「何!？」

男は驚いて上を見上げた。

その刹那、ヒナギクの踵落としが男の顔面に埋ずまり、男は気絶して倒れた。

「てめえ、よくもやりやがったな!」

側に居た男がそう言って、仲間を呼び一斉に襲い掛かった。

「っ!？」

ヒナギクは迫る連中を避けようとしたが、着地したばかりで回避出来ない事に気付く。

（こうなったらあれしか無いわね！）

そう思ったヒナギクは、咄嗟に機転を利かせ、左足を軸に360度回転して足払いで全員を引っくり返した。

ヒナギクは立ち上がり、乱れた髪を整えながら言う。

「あんたたち、怪我をしたくなかったら大人しくお家に帰った方が
良いわよ」

「くそつ、覚えてろ！」

連中は捨てゼリフを吐くと、慌てて逃げ出した。

「忘れ物よ！」

言ってヒナギクは側で気絶している男を逃げていく連中に向かって蹴り飛ばした。

すると飛んで行った男の頭が、逃げる連中の頭に順番にぶつかってドレミファソラシと綺麗な音を奏で、地面に落下して高いドの音を奏でた。

ヒナギクは溜め息を吐き、肩を竦めながら向きを変えて歩き出す。

（またやってしまった・・・）

ヒナギクは後悔した。

素直に連中の言う事を聴いていれば、こんな事をせずに済んだのではないかと。

そんな事を考えながら自宅の前まで来ると、ヒナギクはハヤテに
出逢った。

「ヒナギクさん、何処行ってたんですか？」

と訊ねるハヤテ。

どうやら、家に居ない自分を心配して捜しに来てくれたらしい。

ヒナギクはハヤテの顔を見ると、直ぐさま抱き付いて涙を流した。

「どうしたんです、ヒナギクさん？」

「私、またやつちやったの」

「はい？」

何が言いたいのか、サツパリ解らなかったハヤテは頭に疑問符を浮かべる。

ヒナギクはそんな彼に笑みを浮かべると、

「何でも無いわ」

と答えて家の門に向かって歩いていく。

ハヤテはそんなヒナギクを見て首を傾げた。

すると、後ろから同年代の少年が「あのー」と声を掛けてきた。

ハヤテは「何ですか？」と返事をしながら振り向いた。

「こ、これを今の方に渡して下さい！」

少年はそう言うのと、＜果たし状＞と書かれた紙をハヤテに半ば強引に押しつけて去って行った。

（果たし状？）

気になったハヤテは紙を開いた。

中にはもう一枚紙があり、それに何かが書かれている様だ。

ハヤテはその紙を広げ、メッセージを読む。

『先刻の仕返しだ。明日の夜、河原に一人で来い。時間は花火で知らせる』

（仕返しって何だ？もしかしてヒナギクさん、何かやらかしたのか？）
「つーか、これ拙いんじゃないか・・・」

ハヤテは果たし状を畳み、ポケットに仕舞う。

（兎に角、これはヒナギクさんに見せてはいけない気がする。僕が何とかしよう、何とか）

そう心に決め、ハヤテは桂の家に静かに入っていく。

To be continued...

第12話：ハンバーグが作れない（前書き）

ハンバーグを作ると言う約束が守れない第12話。

「ハヤテくん、私の為にハンバーグを作ってくれって約束はどうしたのかしら？ by・ヒナギク」

第12話：ハンバーグが作れない

その日、ヒナギクはハヤテの様子が何と無く可笑しい事に疑問を抱いた。

自分と顔を合わせる度^{たび}に何故かそわそわするハヤテ。ひよっとして、何か隠し事があるのだろうか。

ヒナギクはそう思ってしまう。

（少し探りを入れてみようかしら）

ヒナギクはそう考え、授業中も休み時間も、彼の事をジーツと見詰めていた。

「あの、そんなに見詰められていられると、落ち着いて食事も出来ないのですが・・・」

ヒナギクがお昼に食事をしているハヤテを見詰めていると、彼が迷惑そうな顔でそう言った。

「え？あ、ゴメン」

ヒナギクはそう言って顔を逸らした。

ハヤテはそんな彼女を見て首を傾げる。

（もしかして、あの事がバレたのかな？）

そう思ってハヤテは昨日の夜受け取った果たし状の事を思い出す。（つて、それは無いか。もしバレたんなら、色々と言われるだろうし）

「あ、そうだヒナギクさん」

ハヤテは何かを思い出した様に口を開く。

「何？」

「ヒナギクさんは今夜、何か食べたい物とがあります？」

「んー・・・」

ヒナギクは唸りながら考え、答えを導く。

「ハンバーグが食べたいわね」

「ハンバーグですか。解りました。今日はヒナギクさんの為に僕が

腕に縋りを掛けて美味しいハンバーグを作ります」

と腕を捲つてやる気を見せるハヤテ。

するとそこへ、元主のチビがやって来て声を掛ける。

「おい、ハヤテ」

「何ですか、三千院さん？」

とチビの方を向く。

「三千院さん？まあ良いや。お前今、何処で暮らしてんだ？」

「何処でって、ヒナギクさん家ですけど？」

「そうか。って、それはどう言う事だ！？」

「私が拾ったのよ」

と弁当を食べながらそう言うヒナギク。

「え、拾った？」

「そうよ。今、ハヤテくんは家で執事をしているのよ」

「ほお。ヒナギクはそんなに金持ちだったのか」

「な訳無いでしょ。月給壹万円よ」

「何だ、安すぎじゃないか」

「いいえ、僕にとっては大金ですよ」

「だがそれだと私から借りてる一億五千万を返すまで1250年は掛かるぞ」

その言葉にハヤテとヒナギクは沈黙した。

「ヒナギクさん、給料上げて下さい」

「考えとくわ」

「あの、出来ればそこは、良いわよって言うてくれると有り難いのですが」「無理」

即答され、ハヤテは「そうですか・・・」と肩を竦めた。

「まあ頑張れ」

ナギはそう言って自分の席へ戻った。

夕方、白皇から下校したハヤテは、商店街のスーパーに来ていた。

「えーと、挽肉は何処かな」

と店内を回りながらそれを探すハヤテ。

（あつた）

ハヤテは棚に置かれた最後の一個である挽肉を見付けると、そこに手を伸ばした。

すると隣からもう一本手が伸びて来て、それが挽肉の上で重なる。

「あ、すみません」

と手が伸びて来た方を見るハヤテ。

その先には、頬を赤く染めた西沢にしざわ 歩の顔があつた。

「に、西沢さん！？」

「えっ？あ、ハヤテくん！？」

二人は互いに驚き飛び退いた。

「は、ハヤテくんはこんな所で何してるのかな？」

「何って、買い物ですよ。もう・・・最後になるかも知れないから、ヒナギクさんの為にハンバーグを作ってあげようと思って」

「最後って？」

「え、否、何でもありません」

「何でもないって事は無いでしょ！？」

言つて西沢が間合いを詰める。

ハヤテは後ろに退こうとしたが、足を滑らせて尻餅を着いてしまった。

その際、懐から果たし状が落ちたのは言うまでも無い。

「何かな、これ？」

西沢が床に落ちたそれを拾い、中のメッセージを読み上げる。

「先刻の仕返した。明日の夜、河原に一人で来い。時間は花火で知らせる、だって。これは一体何なの、ハヤテくん？」

「ああ、それは」

ハヤテは昨日の事を話した。

「と言つ訳なんですよ」

「・・・・・・」

西沢は無言で挽肉を見る。

だがそこに挽肉は無かった。

「挽肉が消えちゃったよ」

その言葉に、ハヤテは辺りを見回す。

すると三十路前後の主婦がカゴに最後の挽肉を入れて歩いているのが見えた。

「なっ!？」

ハヤテはその場で固まった。

「どうしたのかな？」

とハヤテが見てる物を西沢も見ろ。

「あっ、私の挽肉!」

言って西沢は三十路前後の主婦の下に行き、

「挽肉は渡さないわよ!」

とカゴに手を入れて挽肉を奪ってレジまで駆けて行った。

「ちょ、何なのよあんた!？」

と三十路前後の主婦。

その様子を見ていたハヤテは、

「ヒナギクさんのハンバーグが・・・」

と呟きながらその場に崩れた。

第13話：大切な人の為なら罪人にもなる（前書き）

誰かを守る為ならどんな事でもする第13話。
「ヒナギクさんは、僕が守る！by・ハヤテ」

第13話：大切な人の為なら罪人にもなる

夜、皆が寝静まった頃、河原で一発の花火が上がった。

ハヤテはそれを確認すると、桂家を出て行った。

その様子を見ていたヒナギクは、こっそり後を追う。

（ハヤテくんだったら、こんな時間に何処へ行くのかしら？）

そんな事を考えていると、彼を見失ってしまう。

一方ハヤテは、河原の前まで来ると、後ろを顧みて安堵の溜め息を吐いた。

（まさか、付いてくるとはなあ。まあ此処まで来れば大丈夫だろう）
と河原に顔を向ける。

「よしっ」

と気を引き締め、土手を下って河原に下りて行くハヤテ。

河原に居た連中がそれに気付き、ハヤテを取り囲む。

「つて、あの女じゃねえじゃん。てめえ、一体何者だ？」

「ああ、そいつ、あの女の彼氏っすよ」

「ほお。姫を守るナイト様って奴か。だが生憎、俺たちにはお前とやる理由が無い。戻ってあの女を連れてきな」

と連中の一人が中指を突き立てて挑発する。

「いいえ、そうはいきません。ヒナギクさんを殺ると言っなら、僕が貴殿方を潰します」
あなたがた

「へっ、この人数相手に度胸あるじゃねえか。面白い。お前ら、殺っちまおうぜ！」

連中の一人がそう言うのと、全員でハヤテに襲い掛かる。
「っ！？」

ハヤテは咄嗟に地を蹴って上空に避け、懐からグレネードを取り出して投げる。

「何だ？」

と連中が落ちてきた物に注目する。

その瞬間、グレネードが爆発して連中を八方に吹っ飛ばす。

「うわああああ！」

と連中の悲鳴が木霊する。

「くそっ、爆弾なんて卑怯だぞ！っかそれ持ってる時点で犯罪じやねえのか！？」

ハヤテは着地すると、

「大切な人を守る為なら、そんなの僕には関係ありません」

そう言っただけでランチャーを取り出した。

「さて、誰から逝きたいですか？」

その問いに連中は焦って逃げ出そうとする。

「逃がしませんよ！」

言っただけでランチャーのトリガーを引いた。

ドカーンッ！

放たれた弾が連中の一人に命中して爆発し、爆風で全員を遥か彼方まで吹っ飛ばした。

ハヤテはロケットランチャーを仕舞い、ふと橋を見上げる。

その先にはヒナギクが居た。

「一寸ハヤテくん！今のは何よ！？」

そう言っただけでヒナギクは橋から飛び下り、ハヤテの前に着地する。

「ひ、ヒナギクさん、何時から此处に！？」

「ハヤテくんが何かを吹っ飛ばした所から。で、何してたのよ？」

「すみません。それは内緒って事で・・・」

「ふーん。私には言えないって訳？」

言っただけでヒナギクはハヤテを睨む。

（こ、怖い……。いつその事全部話して楽になってしまおうか。否、しかしそれだと余計な心配掛けるしなあ・・・）

「一寸、何黙ってたんのよ？」

「ああっ！」

ハヤテはそう叫びながら空を指差した。

ヒナギクは驚いてハヤテが指した方向を見る。

その隙にハヤテは脱兎のごとく逃げ出した。

「あつ、ハヤテくん！？待ちなさい！」

ヒナギクはハヤテの後を追いつ、直ぐに追いついて捕まえる。

「見逃して下さい、ヒナギクさん！」

「駄目よ。何が遭ったのかちゃんと話さないと放さないんだから」

ヒナギクのその言葉に、冷たい風がピューツと吹いた。

「ヒナギクさん、今のギャグ寒いですよ？」

ハヤテがそう言うつと、ヒナギクは額にピキツと怒りマークを浮かべた。

「今のはギャグじゃない！」

ヒナギクはそう怒鳴り、ハヤテを背負いつ投て地面に叩き付けた。

「痛つ！何するんですか！？」

「五月蠅い！」

言つてヒナギクは立ち上がったハヤテに助走無しドロップキックをお見舞いする。

「うおつ！？」

ハヤテは吹つ飛び、地面を転がる。

「あ、ごめんハヤテくん！」

ヒナギクは我を取り戻し、ハヤテに駆け寄つた。
するとハヤテは例の果たし状を取り出し、彼女に渡す。

「何これ？」

「ヒナギクさん宛てです。昨日、渡されました」

ヒナギクは果たし状を開いて無意識に読み上げる。

「先刻の仕返しだ。明日の夜、河原に一人で来い。時間は花火で知らせる。つて、何よこれ！？」

「ヒナギクさん、昨日、何かしたんですか？」

「昨日？えーと、昨日は何か・・・」

と昨晚の事を思い出すヒナギク。

「何かしたわね」

「何したんですか？」

「商店街を屯していた数人の不良に絡まれたから叩き熨めしたのよ」
「それじゃあ先刻のはその仲間でしょうか」

「でしょうね。それより、有り難うね。私の為に」

「いえ。主人を守るのが執事なので、当然ですよ。て言うか僕、疲れたんで少し寝ます」

ハヤテはそう言つて、夢の世界に旅立つた。

「一寸ハヤテくん、こんな所で寝たら風邪引いちゃうわよ!？」

・・・返事がない。ただの屍のようだ。

「一寸、巫山戯ないでよストーリーテラー!」

「ストーリーテラーに突っ込んで何も始まらない」

と言うのは天の声ことア　ゴくん。

「・・・・・・・・」

ヒナギクは何も言い返せず沈黙してしまった。

(取り敢えず、家まで運ばないと)

ヒナギクはハヤテに背を向け、彼の体を背負って立ち上がる。

その際、彼女は思わず「重っ」と口にする。

(この人、私より重いわ。多分)

そう思いつつ、ヒナギクは家路へと着いた。

第14話：マラソン自由型其の一（前書き）

マラソン大会再びの第14話、前編。

「ヒナギクさん、一緒に頑張ります！b y ・ハヤテ」
「嫌よ。b y ・ヒナギク」

第14話：マラソン自由型其の一

ある日の午前。突如、全校集会が開かれ、ハヤテとヒナギクは指示通り体育館へとやって来た。

壇上には理事長の葛葉 キリカが立っている。

「今日、皆に集まって貰ったのは、重要な話があるからだ。これから、白皇学院伝統行事の一つ、マラソン自由型を行う。各自、体育着に着替えて校庭に集まるように。尚、優勝者には」

キリカが話しをしている途中、ハヤテがヒナギクに言う。

「頑張りましょう、ヒナギクさん」

「え、私と組むの？」

「僕とじゃ嫌なんですか？」

「嫌だ。だって、ハヤテさんと一緒に居てろくな事起きた甲斐無いもん」

その言葉が、矢となってハヤテの心にグサツと刺さる。

「酷いです、ヒナギクさん」

「何が？」

ヒナギク、自覚無し。

「もう良いです。他当たります」

とハヤテが落ち込んで去ろうとした時、高等部一年の^{ひな}日比野 文とシャルナが現れた。

「あの、もう皆行っちゃいましたよ？」

「残っているのはあなた方二人だけなのに誰と組もうと言うのですよるか？」

二人の言葉にハヤテとヒナギクは辺りを見回した。

二人の言う通り、残っているのは自分たち二人だけ。

「何か起こるわ、これ。森の中にある吊り橋が落ちたりするのよ、屹度。たださえ高いの嫌いなのに・・・」

「大丈夫ですよ、ヒナギクさん。僕が付いてます」

「だから余計心配なんじゃない！」

「あのー、お取り込み中悪いんですけど、そろそろ行かないと始まりますよ。それじゃあ」

文はそう言つてシャルナと共に去つて行つた。

「取り敢えず行きましようか」

と校庭に移動を開始する二人。

その途中、校内で迷子になっている鷺ノ宮さぎのみや 伊澄を見掛ける。

「あ」

伊澄が二人に気付き、近付いてきた。

「ハヤテ様に生徒会長さん。ナギを見掛けませんでしたか？一緒に自由型に出るペアになっていたのですが・・・」

「ふーん。迷子なんだ」

「迷子なんですね」

「そんな、迷子なんかじゃないです」

伊澄は泣きそうな顔で否定する。

「校庭ならこつちですよ、伊澄さん」

そう言つてハヤテは伊澄の手を掴む。

伊澄はその行動に頬を赤くした。

「一寸ハヤテくん？」

「何ですか、ヒナギクさん？」

「その手は何？」

と繋がった二人の手を見るヒナギク。

「ああ。これは、伊澄さんが迷子にならないようにと思って」

「ふーん」

ヒナギクは相槌を打つと、歩行ペースを上げた。

「私、先に行つてエントリーしてくるわね」

「そうですか。じゃあお願いします」

ハヤテはそう言つて、ヒナギクを見送った。

「所でいすっ」

と言い掛けてハヤテは驚く。

「何処ですか伊澄さん!？」

辺りを見回すが、伊澄の姿は発見出来ない。

「はあ」

ハヤテは溜め息を吐いて肩を竦めた。

「伊澄さん、また迷子ですか。手を繋いでても迷子になるなんて・・
・。はっ！絶望した！手を繋いでても迷子になる伊澄さんに絶望した！」

ハヤテが叫ぶと、ナギが現れた。

「ハヤテ、何をこんな所で叫んでいるのだ？」

「あ、三千院さん。先刻、伊澄さんが捜してましたよ」

ハヤテはそう言つと、

「それじゃあ」

と残して校庭まで駆けて行つた。

第14話：マラソン自由型其の一（後書き）

鷺ノ宮が鷺ノ宮になってましたのを修正。ボケたかな？

第15話：マラソン自由型其の二（前書き）

執事は死なない第15話。

「怪我はありませんか、ヒナギクさん？ by・ハヤテ」

第15話：マラソン自由型其の二

ハヤテが校庭に着くと、体育着を着用したヒナギクに叱られた。

「遅い！何やってたのよ！？」

「すみませんすみません。ほんとすみません」

とハヤテは頭を下げて必死に謝る。

「まあ良いわ。取り敢えず位置に着いて頂戴」

ヒナギクはそう言うのと、ハヤテを連れてスタート地点に着く。

「位置に着いて！」

と掛け声が上がり、

「よいい！」

パアンツ！

その音を合図に、全員が走り出す。

（このマラソン、何としても優勝しなくては。その為には・・・）

「ヒナギクさん、ショートカットを使いましょう！」

「はあ！？」

ヒナギクは何故と言う顔で素っ頓狂な声を上げた。

「ヒナギクさんが通りたくないと言うのは解ってますが、僕はどうしても勝たなきゃいけないんです！一憶五千万の借金を返す為に！」

「・・・そう言う事なら、仕方ないわね。協力してあげる。まずは第一チェックポイントまで行くわよ」

そう言つてヒナギクは敷地図を出すと、現在走っている場所を確認した。

「ハヤテくん、此処から右に真っ直ぐ行けば近道よ」

「ではその道を」

二人は右に折れ、森の中へ入った。

だがそれが拙かった。

その道には大きな崖があり、真っ直ぐ進めない。

「何でこんなのが立ってるのよ？」

「可笑しいですね。この前は何も無かったのに」

と崖を見上げる二人。

「元の道に戻りますか？」

ヒナギクの高所恐怖症を案じたハヤテは彼女にそう訊ねた。

「な、何言ってるんのよ！？そんな事してたら負けちゃうじゃないのよ！」

「じゃあ登りますか？」

「……………」

ハヤテの問いにヒナギクは沈黙した。

（迷ってる暇なんて無いわ。登るのよ、ヒナギク）

と内心自分に言い聴かせ、崖を登り始めるヒナギク。

そんな彼女を追う様に、ハヤテも続く。

「ヒナギクさん、絶対に下を見ちゃ駄目ですよ？」

「下？」

ハヤテの忠告にも関わらず、ヒナギクは下を見る。

地上約3メートル。

全身に悪寒が走り、鳥肌が立つヒナギク。

「だから見るなって言ったんですよ。僕の忠告無視しないで下さい」

「そんな事言ったって、見るなって言われたら余計見なくなるじゃないのよ」

ヒナギクは震えた声でそう答えた。

「はあ、そうですか。兎に角、これを登りましょう」「無理」

ヒナギクは即答した。

「では僕一人でゴールするので、ヒナギクさんはそこで待っていて下さい」

そう言っただけでハヤテはヒナギクを追い越し、あっという間に頂上に登ってしまった。

「一寸ハヤテくん！？置いて行かないでよ！」

そう言っただけで目を潤すヒナギク。

「でしたら頑張っただけで登ってきて下さい」

「そんな事言われたってこんなの無理よ！落ちたらどうすんのよ！？」

「その時は僕が助けます。ですから登ってきて下さい」
言ってハヤテは笑みを浮かべる。

ヒナギクはそれに応えて真剣な顔になり、崖を登り始める。

（怖くない、怖くない）

とヒナギクは自分に言い聴かせながら、着々と登って行く。しかし

右手で掴んだ崖の一部が外れ、バランスを崩して落下を開始。

ハヤテは「ヒナギクさん！」と叫びながら崖を下り、足場を蹴って彼女を空中で捕まえると、近くに生えていた木の枝を掴んで落下を止めた。

「大丈夫ですか、ヒナギクさん？」

「う、うん。何とか・・・」

とその時、バキツと枝が折れ、二人は再び落下を開始した。

ハヤテはヒナギクにダメージを与えまいと、彼女を抱き抱えて上を向く。

その直後、ハヤテの背中が地面に叩き付けられた。

「がはっ！」

ハヤテは吐血した。

「一寸、ハヤテくん!？」

「う・・・怪我、しません・・・でしたか・・・？」

ハヤテは顔を引き攣らせながらそう訊く。

「私は大丈夫。それよりハヤテくんの方が」

「僕なら平気ですよ。少し休めば復活します。て言うか、退いてくれますか？」

「え？」

ヒナギクは言われて今の状況を確認すると、頬を赤らめた。

（嫌だ。端から見たらこれ、私がハヤテくんを押し倒して・・・っ！？）

その時、元来た道に何者かの気配を感じたヒナギクは、その方向を向いた。

その先には、見たら誰もが勘違いをするこの光景を見て固まった日比野 文とシャルナが居た。

「ち、違うのよこれは！先刻、崖から落ちた時に！」

ヒナギクが必死にそう弁解すると、二人は辺りを見回して訊ねる。「崖なんて何処にも無いですよ？」

「え？」

ヒナギクは崖を探した。しかし、辺りは森だらけ。崖など見付からない。

そもそも、校内に崖がある事自体可笑しい。

「それじゃあお二人とも、お先に失礼します」

文たちは律儀にお辞儀をすると、二人を置いて先に進んで行った。残されたヒナギクは、

「何だったのよあれは！？」

とムカついて思わず叫んだ。

第15話：マラソン自由型其の二（後書き）

何か凄え飽きた。と言うかこれからも困難が待ち構えてるのを描くとなると正直面倒。誰か、変わってくれ。

と言うのは置いといて、崖が消えるとはミラクルだぜ。有り得ないぜ。

けどこれは原作の設定に則った小説なので、ハヤテや他の執事が空を飛んだり、何も無いところにいきなり山、川、橋、吊り橋、崖などが現れたりするのは自然な現象なのです。

て事で、次回は、ト ネコも驚き。モンハウだらけのダンジョンをお送り・・・せず、マラソン自由型の続きをお送りします。

第16話：マラソン自由型其の三（前書き）

c h u n s o f t さんにごめんなさいの第16話。
「不思議のダンジョンはほんのお遊びです。b y ・ハヤテ」

第16話：マラソン自由型其の三

ヒナギクは遅れた分を取り戻す為、第一チェックポイントまでハヤテを背負って一直線に走っていた。

「すみません、ヒナギクさん。僕なんかを背負って走らせてしまつて」

「良いのよ、別に。私がそうしたいからそうしてるんだもの」

言ってヒナギクは頬を赤らめた。

とても恥ずかしかったらしい。

「あ、見て下さいヒナギクさん」

と前方を指差すハヤテ。

進行方向には、日比野 文とシャルナが走っているのが見える。

「これは私たちが速いのかしら？」

ヒナギクはふと疑問に思った事をハヤテにぶつけてみる。

「さあ」

「まあ良いわ。遅いわよ、あなたたち」

とヒナギクが文たちに声を掛けて追い抜こうとすると、丸で文が邪魔をするかの様に前を塞いできた。

「失礼！」

言ってヒナギクは跳んで彼女の上を越え、着地した。が、バランスを崩して転び、膝を擦り剥く。

「大丈夫ですか、ヒナギクさん？」

「有り難う。でも大丈夫、掠り傷だから」

言ってヒナギクは立ち上がり、再び走り出す。

そして文たちを見えなくなるくらい離し、通常コースに出て第一チェックポイントに辿り着く。

「あの、何着ですか？」

ヒナギクはチェックポイントのスタッフにそう訊ねる。

「えーと・・・」

スタッフは机の上にある記録を確認する。

「あなた方は現在二着ですね」

その言葉がヒナギクを喜ばせた。しかし

「但し、後ろからですけど」

その言葉にヒナギクはこけてズザーツと言っ音を出しながら地面を滑った。

「大丈夫ですか？」

スタッフが彼女を心配して近付いてくる。

ヒナギクはスタッフを思いつ切り睨み付けた。

スタッフはそれに怯えながら訊ねる。

「な、何か？」

「別に？」

とヒナギクは作り笑顔をスタッフに見せる。

（こわっ！早く行って貰おう）

スタッフは慌てて薔薇の花を取りに移動した。

「では二人とも、これを着けてゴールして下さい。途中で花びらが散ったりした場合はその時点でリタイアです」

言ってスタッフは薔薇をハヤテとヒナギクに渡す。

「前から思っただけど、これって何か少女革命」

そこまで言くと、ハヤテが薔薇を着けながら掻き消す様に言う。

「それ以上は駄目ですよ、ヒナギクさん」

「ごめん」

ヒナギクは立ち上がり、薔薇を装着して地図を取り出す。

「えっと此処からは、あっちが近道ね」

そう言くとヒナギクは地図を仕舞い、コースを外れて森へと入った。

そして森を暫く進むと、二人の目の前にいきなり洞窟が現れた。

入り口には立て札があり、入るな、とだけ書いてある。

だが人間、断られると余計行動を起こしたくなってしまう。

ヒナギクは立て札を無視して中に入って行った。

すると辺りが真っ暗になり、<迷宮の洞窟1F>と言う文字が二人の前に浮かんで直ぐ消え、視界が広がった。

そこは、何も無い部屋で、片隅に出入り口が一つだけある。

「突っ込んで良いかしら？」

「どうぞ」

ハヤテの了承を得てヒナギクは突っ込む。

「何よこれ！？ト ネコの不思議のダンジョンじゃない！」

「ああ、確かにそれっぽいですね。しかし何でこんなのが白皇の敷地にあるのでしょうか？」

とヒナギクの背中から降りるハヤテ。

「背中大丈夫なの？」

「ええ、お陰さまで」

と笑みを浮かべる。

「取り敢えず、階段探しましょう」

言ってハヤテは部屋の片隅にある出入り口に向かって歩いていく。

「待つて、ハヤテくん」

ヒナギクは慌てて後を追ひ、一歩手前で地雷の罠を発動させてしまった。

ドカーン！

地雷が爆発し、ヒナギクは10のダメージを受けた。

残りHP5。

ハヤテは爆発に巻き込まれて5のダメージを受けた。

残りHP10。

「ちよつ、何でダメージにこんな差があんのよ！？不公平じゃない！」

「知りませんよ、そんな事」

と一歩進むハヤテ。

するとヒナギクも一歩進む。

「て言うか、何で同じ所通ったのにハヤテくんは地雷を踏まない訳？」

「ああ、それは・・・」

ハヤテはメニューを開き、仲間からハヤテを選択し、強さを表示した。

名前：綾崎　ハヤテ　Lv.1　HP：10/15

職業：桂家執事兼雪路のお世話係

所属：白皇学院高等部2年

特性：畏を踏まない　死なない

「だそうです」

「ムカつくステータスね！て言うか死なないって何！？」

「さあ」

とハヤテは肩を竦めてみせる。

「所で、ヒナギクさんの特性は何ですか？」

疑問に思ったハヤテはヒナギクの強さを表示した。

名前：桂　ヒナギク　Lv.1　HP：5/15

職業：ハヤテの主人

所属：白皇学院高等部2年

特性：1ターンに2回行動　常時バーサーカー　会心の一撃が出

やすい　偶にカウンター

「最悪なステータスですね」

「五月蠅いわね！」

ヒナギクがハヤテに攻撃をした。

会心の一撃。

ハヤテは30のダメージを受けた。

しかしハヤテの特性によりHPが1残る。

「仲間に攻撃しないで下さい！」

「そんな事言われても特性なんだから仕方無いじゃない」

「・・・・・・・・」

ハヤテは言葉を失った。

「兎に角、階段を見付けるまでの辛抱よ」

「ですね」

言ってハヤテは通路に出て進み、次の部屋に入る。
モンスターハウスだ！

「マジですか！？ヒナギクさん、代わって下さい！」
そう言ってハヤテはヒナギクと場所を交換した。
ヒナギクの攻撃。

ハヤテに5のダメージを与えた。
「ちよつ、相手が違うでしょ！？」

「だから、バーサーカーだからしょうがないのよ」
モンスターたちが一歩動く。

ハヤテは1ターンやり過ごした。

ヒナギクは正宗を装備。攻撃力が5上がった。

ヒナギクはスライムに攻撃した。

ミス。スライムはダメージを受けない。

スライムの攻撃。

ヒナギクは3のダメージを受けた。

残りHP4。

（いかん！このままではヒナギクさんが死んでしまう！）

ハヤテは覚悟を決めてヒナギクと場所を代わった。

ヒナギクは様子を見た。

スライムの攻撃。

ハヤテは2のダメージを受けた。

残りHP2。

別のスライムが2匹ハヤテに近付く。

ハヤテは正面のスライムに攻撃した。

スライムに5のダメージ。

スライムは倒れた。

ハヤテとヒナギクはは2の経験値を手に入れた。

ヒナギクの攻撃。

会心の一撃。

ハヤテは30のダメージを受けた。

しかし、特性により1残る。

スライムたちの攻撃。

ハヤテは合計4のダメージを受けた。

しかし、特性により1残る。

ハヤテは斜め左前のスライムに攻撃。

スライムに5のダメージを与えて倒した。

ハヤテとヒナギクは2の経験値を手に入れた。

ヒナギクは正宗で壁を破壊し、斜めに進んだ。

「一寸、何やってんですかヒナギクさん!？」

「何って加勢よ」

「ヒナギクさん、死んじゃうのでやめて下さい」

「大丈夫よ。いざとなったらハヤテくんの後ろに隠れるから」

言ってヒナギクは笑みを浮かべた。

それと同時にスライムがヒナギクに攻撃した。

ミス。ヒナギクはダメージを受けない。

ヒナギクはカウンターを放った。

スライムは5のダメージを受けて倒れた。

ハヤテとヒナギクは2の経験値を手に入れた。

ハヤテはレベルが2に上がった。

HPが3増えた。

攻撃力が1上がった。

守備力が1上がった。

素早さが1上がった。

命中が1上がった。

特技・ハヤテのごとく!を覚えた。

ヒナギクはレベルが2に上がった。

HPが3増えた。

攻撃力、守備力が5上がった。

素早さ、命中が3上がった。

「ハヤテくん。私、レベルが上がったわ」

「ああ、良かったですね」

この時、ハヤテは思っていた。これ以上強くなられては困る、と。それより、僕の特技で部屋のモンスターを一掃します」

言ってハヤテは特技・ハヤテのごとく！を発動した。

部屋のモンスターにそれぞれ10のダメージ。

部屋のモンスターは全て倒れた。

「では行きましょうか、ヒナギクさん」

言ってハヤテが振り向くと、ヒナギクが全裸になっていた。

「一寸、何脱いでんですか？」

「・・・たの・いよ」

「はい？」

「ハヤテくんの所為だっけ言っただのよ！」

怒ったヒナギクが、正宗を振るう。

ハヤテは避ける間もなく彼女の攻撃を喰らい、9999のダメージを受けた。

ハヤテ、特性発動せず死亡。

それにより二人はダンジョンから追い出された。

「あ、あの、その、お、お二人で何をなさっているんですか！？」

その問いと共に、顔を真っ赤に染めた文とシャルナが現れた。

「先輩方はこんな所でそんな事をしてたんですか？」

突っ込み担当シャルナの問いにハヤテはヒナギクの全裸姿を見る。

「何見てんのよ？」

ヒナギクがハヤテを睨む。

「すみません、ヒナギクさん。僕の所為で服が無くなってしまっただけ」

「あの、服ならそこにありますけど？」

そう言っただけでシャルナがヒナギクの後ろを指差す。

「え？」

ヒナギクが振り向くと、そこには体育着が落ちていた。

「良かったあ」

ヒナギクは体育着を拾い、頬にくつつける。

「あの、どうでも良いですけどヒナギクさん。早く着ちゃって下さい」

「え？」

ヒナギクは自分が置かれてる状況を確認し、裸である事に気付くと、ハヤテに助走無しドロップキックをお見舞いした。

ハヤテはその場に倒れ、ピクピクと痙攣を起こす。

「ハヤテくんのスケベ！」

そう言っ物陰に隠れ、ヒナギクは体育着を着用した。

「あの、私たち先に行ってますね」

文たちは律儀にお辞儀をすると、先に進んで行った。

「ヒナギクさん、僕たちも行きましょう」

そう言っ立ち上がり、先に進むハヤテ。

「一寸、置いてかないでよ」

と慌てて後を追うヒナギク。

それから暫くして、二人は通常コースに出て第二チェックポイントに辿り着いた。

To be continued...

第16話：マラソン自由型其の三（後書き）

次回は第三チェックポイント。
巫座戯ず真面目にやります。

第17話：命がけの救助（前書き）

運命の齒車が回り出す第17話。
「僕は死ぬかも。by・ハヤテ」

第17話：命がけの救助

何とか第二チェックポイントをクリアしたハヤテ一行は、次のポイントを目指して一直線に進んでいた。

「この様子なら順調ね」

ヒナギクがそう言った時、足元に張られた縄に引っ掛かり、ハヤテと共に転んでしまった。

「そう言えば此処、こんな罠ありましたね」

「これ、去年私が作った罠よ」

ヒナギクがそう言うと、ハヤテが可哀想な者を見る目で見詰めた。

「何よその顔は？」

「否、別に」

「明らかに言いたそうな顔してるけど？」

「でも言いませんよ」

ハヤテがそう言うと、ヒナギクが胸倉を掴む。

「言いなさい」

「言っても良いですが、怒りませんか？」

「うん、怒らないわ」

とニツコリ笑顔になるヒナギク。

（怖い。これ言ったら絶対怒られる。けど、言わないと何されるか判らないからなあ）

そう思ったハヤテは深呼吸して言葉を放つ。

「ヒナギクさんの様な方が自分で仕掛けた罠を忘れるって、愚かとか言い様が無いですね」

その言葉が矢となり、ヒナギクの心にグサツと刺さる。

そして暫しの沈黙の後、ピキツと額に怒りマークを浮かべる。

（はっ！駄目よヒナギク！こんな事で怒って攻撃するから一着にならないのよ。此処は取り敢えず落ち着こう）

ヒナギクは深呼吸をし、心を落ち着かせる。

「どうしても良いけど、早く進みましょう?」

ヒナギクはそう言って立ち上がると、ハヤテに手を差し出した。ハヤテは一旦、首を傾げ、差し出された手を掴んで立ち上がる。

「あの、怒らないんですか?」

「ハヤテくんは私に怒って貰いたいのか?」

と引き攣り笑みで訊ねるヒナギク。

「お願いだから怒らないで下さい」

「……………」

（やっぱ無理!）

と此処でフラストレーション解放。ヒナギクは正宗を装備して攻撃体勢に入った。

「すみませんヒナギクさん!」

「謝ったって許さないんだから!」

言ってヒナギクは正宗を振るう。

ドカツ、バキツ、ボグツ!

ハヤテはあつという間にボツコボコにされてしまった。

「そこで反省してなさい!良いわね!?」

ヒナギクはそう言って睨み付けると、一人去って行った。

「ヒナギクさん、待って下さいよ!」

とハヤテが慌てて後を追う。

「来るな!」

ヒナギクは正宗を振るってハヤテを遠くに吹っ飛ばした。

（あ……。ま、いつか。揃ってゴールする必要なんか無いし）

ヒナギクは正宗を空中に放り投げ、走り出した。

一方、ハヤテは、お空を舞っていた。

（僕は一体、何処まで飛んで行くんだろう?）

呑気にそんな事を考えていると、地面に墜落した。

「痛!」

ハヤテは起き上がり、辺りを見回した。

そこは第三チェックポイント。

「今何着ですか？」

ハヤテはスタッフに訊ねた。

「後ろから2番で前から2番です」

どうやら、既に脱落者が出ていたらしい。

「二着ですか。一着は誰ですか？」

その問いにスタッフが記録を調べる。

「三千院、鷺ノ宮ペアとなっており」

ます　　と言おうとすると、ハヤテが走り出した。

（此処からは通常コースを行って二人を追い抜こう。ヒナギクさんには悪いけど、先にゴールしておこう）

ハヤテはそう心に決めると、全速力で通常コースを駆け抜け、第四チェックポイントを通過し、ナギたちに追い付く。

「お二人とも、お先に失礼します！」

言ってハヤテは二人をあつという間に抜き、一気に距離を空けて第五チェックポイントの前にやってくる。

ゴールまで後少し。

ハヤテはゴール目指して走り続け、何の弊害もなくゴールテープの前までやってきた。

このまま行けばゴールだ。しかし

「きゃああああ！助けて、ハヤテくん！」

と言う悲鳴が聞こえ、ハヤテはゴールテープを千切るのを躊躇う。（ゴールしたいけど・・・やっぱ見捨てるなんて出来ない！）

考えた挙げ句、ハヤテは踵を返し、颯爽と駆け付ける事にした。

悲鳴の下に向かつて3分。

ハヤテは崖の前で止まっていた。

向かい側の崖には半分に切れ、垂れ下がった吊り橋。

その吊り橋の、今にも千切れそうなロープに、高所恐怖症のヒナギクが涙をボロボロ零しながら掴まっている。

「頑張つて下さい、ヒナギクさん！今行きます！」

ハヤテはそう叫ぶと、距離を取って助走を付け、空中を滑空して向かい側の崖に垂れ下がっている吊り橋のロープを掴んだ。

真横にはヒナギクの姿が見える。

「助けに来ましたよ」

言つてハヤテがヒナギクに手を伸ばした。

その時、ヒナギクが掴んでいたロープが限界を超え、ブチッと千切れ、彼女は落下を開始。

「ヒナギクさん！」

ハヤテは咄嗟に振り子の如く体を前後に揺らしてロープを放し、前に飛び、空中でヒナギクを抱き抱え、偶々側面に生えていた木の枝を掴んで落下を止める。

「放さないでよね」

とヒナギクが震える声で言った。

「ええ、放しません」

ハヤテがそう言うのと、枝がボキッと鈍い音を立てて折れた。

「え？」

ハヤテは上を向く。

支える物は無い。

下には足場が無い。

結果、引力に従つて二人は落下する事になる。

「うおおおおつ、落ちるー！」

落下を開始したハヤテは思わずそう叫んだ。

ヒナギクはあまりの怖さに完全に失神。

どうしたものか。

ハヤテは頭をフル回転させて生還の術を考える。しかし、その術は浮かばず、彼は絶望した。

（このままでは二人ともあの世行きだ！そうなるくらないならせめて、ヒナギクさんだけでも！）

ハヤテは体を捻つて二人の位置を変えた。

ヒナギクが上、自分が下。

この状況ならヒナギクは助かるかも知れない。しかし、ハヤテは確実に死ぬだろう。

ハヤテはそんな危険を承知でこの行動に出たのだ。

（へえ。ヒナギクさんって、近くで見ると結構可愛いんだなあ）

そんな事を考えていると、ハヤテの唇が吸い込まれる様に彼女のそれに近づく。

（つて、僕は何をしてるんだ！？こんな無防備な少女の唇を奪うなんてどうかしてる！そもそも、僕たちは未だ付き合ってもいないじゃないか。それに、ヒナギクさんが僕を好きだとは限らない。しかし・・・）

すると、ヒナギクが意識を取り戻して薄目を開いた。

「ハヤテ・・・くん？」

「何ですか？」

「もう、言えなくなるかも知れないから、今の内に言っておくね」

ハヤテは首を傾げた。

「私、初めて逢った時から、あなたの事が好きだった」

「え？」

「でもね、他に居たのよ。あなたの事を好きな人が。だから言えなかった。好きだ、って・・・。ハヤテくんは、誰が好きなの？」

その問いにハヤテは考える事なく答える。

「それは勿論、ヒナギクさんですよ。ヒナギクさんは優しいし、頼り甲斐がある。その反面、怒ると怖いですが、そこがヒナギクさんの良い所ですよ。僕はそんなヒナギクさんに憧れました。けど、中々言い出せませんでした。だって僕、いつもヒナギクさんに迷惑掛けてばかりで、怒らせてたから、それで屹度、嫌われてるんじゃないかって思ってた・・・」

ハヤテがそう打ち明けると、ヒナギクはクスクスと笑った。

「バカね。そんな訳無いでしょ。それに、嫌いな相手を執事として雇うかしら？」

「ですよ」

ハヤテはそう言うと、真剣な顔付きになり、ヒナギクの唇を躊躇せず奪い取った。

その直後、全身に物凄い激痛。吐き出した血液がヒナギクの口内に送り込まれた。

ヒナギクはその液体を、誤って飲み込んだ。

しかし、それでも口付けは続く。

（あら？）

ハヤテの意識が無い事に気付いたヒナギクは、唇を離して頬を叩いた。

「ハヤテくん！？起きてハヤテくん！」

しかし、反応は無い。

（何とかしなくちゃ）

ヒナギクは辺りを見回して千切れた吊り橋のロープを手元に見付けた。

放さず持っていたらしいそれは、人を二人結ぶには丁度良い長さだった。

ヒナギクはそれをハヤテの背中の下に通すと、彼を背中に乗せて結び、崖を登り始めた。

（こんな崖、怖くないわ）

そう自分に言い聴かせ、慎重に崖を登るヒナギク。

（待ってて、ハヤテくん。今、病院に連れて行くから）

ハヤテの身を案じる事で、ヒナギクは高所恐怖症であることを忘れる。

そうする事数時間。

終にヒナギクは崖を登りきった。

「はあ、しんどっ！」

（そう言えば、マラソンはどうなったんだろう？）

ヒナギクはそんな事を考えながら都内の私立病院に急いだ。

第17話：命がけの救助（後書き）

ハヤテ訪れた死の予感。

次回、ハヤテのごとく！「記憶喪失」

第18話：記憶喪失（前書き）

記憶が飛んだ第18話。

「私を思い出して、ハヤテくん！by・ヒナギク」
つてな訳で、予定通り「記憶喪失」です。

つーかどうでも良いが、止め処が判らなくなって6・0000字くらいになってしまったorz・・・

第18話：記憶喪失

病院の集中治療室。

ハヤテはそこで手当てを受けている。

ヒナギクはその部屋の前で、神頼みをしながら待っていた。

（神様、お願いです。どうか、ハヤテくんを助けてあげて下さい）
すると、上の手術中と言う明かりが消え、扉が開いてドクターが出て来た。

ヒナギクはそれに気付くと、真剣な表情でドクターに訊ねる。

「先生、ハヤテくんは!？」

ドクターはヒナギクの両肩に手を置き「大丈夫だよ」と一言だけ言つて去つて行つた。

その後、担架に乗せられたハヤテが病室のベッドに移され、ヒナギクもそこに移動する。

「ハヤテくん」

とヒナギクが目を瞑っているハヤテに声を掛ける。

すると、ハヤテが目を開けて口を開いた。

「此処は何処？」

「病院よ」

「病院？」

「そう。あなたは壊れた吊り橋のロープにしがみついて動けない私を助けようとして一緒に落ちて、墜落時に気絶したから私が背負つて連れて来たの」

「そうだったんですか。所で、誰なんですかあなたは？」

その言葉に、ヒナギクは固まった。

（冗談よね？）

そう思つて、一応訊ねる。

「私は桂 雛菊。勿論、覚えてるわよね？」

だが、ハヤテは首を振るつた。横に。

「・・・・・・・・」

ヒナギクはショックで言葉を失い、俯いてしまった。

（これってもしかして、記憶喪失？）

「ねえ、あなた」

「はい？」

「自分の名前言ってみて」

「綾崎 颯です」

「名前は覚えてるみたいね。じゃあ、現在通ってる学校は言える？」

「潮見高校です」

（あら、やつぱり？）

「あの、かつ」

ハヤテがそう言い掛けた所で、ヒナギクが掻き消すように言う。

「ヒナギクで良いわ」

「はい。それじゃあ、ヒナギクさん」

「何？」

「ヒナギクさんは僕の事をご存知みたいですが、僕とはどう言う関係なんでしょうか？」

「主従関係」

「成る程、メイドさんですね。でも家にメイドなんか・・・」

「バカ、逆よ。私が主であなたが執事」

「んー・・・いまいちピンと来ないのですが」

「そう。あ、今先生呼んで来るわね」

そう言つてヒナギクは病室を出て行った。

残されたハヤテは溜め息を吐く。

（ナースコール押せば良いのに）

ふとハヤテはそう思った。

その時、

「痛！」

ハヤテは頭を押さえた。

（何だ？頭が痛い）

そしてハヤテは、午前12時ジャストに意識を失った。

*

2008年2月1日午前9時。

ハヤテは病院の病室のベッドの上で目を覚ました。
横を向くと、ピンクの長髪に金のヘアバンドを留めた、制服を着た見知らぬ美しい女性が椅子に座って目を瞑っている。

その女性はハヤテが目を覚ました事に気付いて目を開けた。

「おはよう、ハヤテくん」

言って笑みを浮かべる女性。

「あの」

「ん？」

「あなたは一体、誰なんですか？どうして僕の名前を」

ハヤテがそう訊ねると、女性は肩を竦めて溜め息を吐いた。

「私は桂 雛菊。ヒナギクと呼びなさい」

ハヤテは「はあ」と素っ気無い返事をする和讯ねた。

「所で、此処は何処なんですか？」

「病院よ」

「病院？僕、事故にでも遭ったんでしょか」

「んー、遭ったと言えば遭ったわ。2年前に」

「はあ！？」

ハヤテは言葉の意味が理解出来ず素っ頓狂な声を上げた。

「突拍子で分からないわよね。説明すると、あなたは2年前に事故で記憶を失ったの。それも一時的な物では無くて、一週間置きに起きてるのよ」

そう言ってヒナギクは手帳を取り出した。

「これにはね、2年前からずっと書き続けているあなたと一緒に過

「ごした記録があるの」

ヒナギクはその記録手帳をハヤテに渡した。
ハヤテはそれ捲る。

最初のページには2006年2月1日とあり、退院記念日と書いてあった。

下の行は2日で、ハヤテとヒナギクがツーショットで写ったプリクラが貼られている。

その下からは7日まで何も書かれておらず、8日に退院記念日。9日に再びプリクラ、と同じ様なものが3月2日まで続いており、3月3日にはヒナギクの誕生日、それ以降はまた記念日やらプリクラなどが、2008年1月31日まで貼られていた。

「あの、所でヒナギクさん」

「ん？」

「この、二人揃って無事卒業つてのは何ですか？」

そう言っつてハヤテが指差したのは、2007年3月18日だった。

「ああ。それは、私とハヤテくんが白皇学院を無事に卒業した日よ」

「白皇学院！？つて、あの名門校じゃないですか！」

「そうよ。あなたはその学校の生徒だったの」

「え？」

「訳ありで編入して来たのよ。潮見高校から」

「訳？」

「んー、それを聴いちゃうと多分悲しくなるから言わないわ。それより、検査があるから先生呼んでくるわね」

ヒナギクはそう言っつと、病室を出て行った。

残されたハヤテはふと思った。

（あの人、僕の彼女なのだろうか・・・？）

その時、見慣れた格好の女の子が赤い花を持ってやって来た。

「ハヤテくん、お見舞いに来たよ」

そう言っつのは、

（西沢さんだ。ヒナギクさんは僕が白皇に編入して来たと言っつた

から、この人と会うのは、2年以上前か)

「お久しぶりです、西沢さん」

その言葉が妥当だと考えたハヤテは笑みを浮かべそう口にした。
しかし歩はクスクスと笑って言う。

「あら、嫌だ。ハヤテくん、昨日会った事忘れちゃったの?」

「え、昨日会ったんですか?」

「あ、そっか。ハヤテくんは記憶喪失だったんだね。ごめん。私ってバカだね」

と自分の頭を小突く普通少女。

そこへ、ヒナギクがドクターを連れて戻ってくる。

「歩、来てたんだ?」

「その声は、ヒナギクさん?」

と振り向く普通な歩。

「つて、先刻から黙って聴いてたら何かな、ストーリーテラーさん! 普通って言わないでくれます! ?」

「一寸歩、誰に突っ込んでるの?」

「ストーリーテラーさんだよ。聞こえない?」

.....

場を沈黙が支配すると同時に、ヒナギクが可哀想な者を見る目で歩むを見詰める。

「歩、あんた帰って少し寝た方が良いわよ?」

ヒナギクは歩の身を案じてそう言った。

「私は至って健康よ」

「あ、そ。それより、検査あるから失礼するわね」

ヒナギクは歩にそう言うと、ハヤテの下に移動した。

「ハヤテくん、検査行くわよ」

「検査?」

「そう。MRIを取って異常が無いか調べるの」

「解りました。では行きましょう」

ハヤテはそう言うと、ベッドから降りてヒナギク、ドクターと共

に病室を跡にし、MRIがある部屋へ移動し、脳の検査を済ませ、異常が無い事が分かると、ナースステーションに行って退院の手続きを取った。

病院を出た二人は、ハヤテが前に暮らしていたアパートにやってきた。

「懐かしいなあ、この家」

「一寸待つて。あなたの記憶は何処から欠落してるの？」

その問いにハヤテは自分の記憶を遡る。

「確か、親に捨てられた挙げ句、156,804,000円の借金を押しつけられ、それを返済する為に負け犬公園でナギお嬢様を身代金目的で誘拐しようとして失敗に終わり、その後お嬢様が何者かに連れ去られ、僕がお嬢様を助けてそのお礼に借金を肩代わりして貰い、今度はお嬢様に借金を返す為にそのお嬢様の執事として屋敷で働き始めた辺りです」

と正確に言い終え、息を荒くするハヤテ。

「あんた、ナギを誘拐しようとした訳？て言うか、何で失敗したのよ？」

「公衆電話から屋敷に電話を掛けて『綾崎です』と名乗ってしまったんです」

ヒナギクの問いにハヤテがそう答えると、彼女は思いつ切り吹き出した。

「あっははははは・・・おっかしい。笑いが止まんない。はっははははっ、お腹痛い・・・」

と腹を押さえるヒナギク。

笑いすぎてしまいは涙まで出る始末。

「あの、そんなに笑わないでくれます？いくら彼女でも、そこまで笑われると一寸・・・」

ハヤテがそう言うのと、ヒナギクが「はあ？」と目を丸くした。

「僕たち、付き合ってるんじゃないんですか？」

その問いにヒナギクは肩を竦めた。

「何勘違いしてるのよ。同棲はしてるけど、未だ付き合っていないわよ」

「ど、同棲！？どう言う状況ですか、それ！？」

「そんなのどうでも良いじゃない」

ヒナギクはそう言うと言鍵を取り出して解錠し、ドアを開て中に入った。

「ハヤテくんも入って」

その言葉に従い、ハヤテも中に入った。

「今、朝ご飯作るわね」

ヒナギクはそう言うと言靴を脱ぎ、廊下を進んでキッチンへと入って行った。

ハヤテは靴を脱ぐと揃えて置き、廊下を進んでリビングに入った。片隅にはベッドがあり、枕が二つ置かれている。

それを確認したハヤテは、料理を作ってるヒナギクを見て頬を赤く染めた。

（口ではああ言ってたけど、やっぱりそう言う関係んだな）
と解釈し、部屋の観察を再開する。

中央には、小さな長方形のテーブル。

他に見てもそれらしい物が無い事から、恐らくこれが食卓である事が想像出来る。

次にベッドの反対側の片隅に置かれたタンス。

そこにはハヤテとヒナギクの、二人分の服が入っているだろう。と、此処でハヤテの脳裏にある光景が浮かぶ。

それは、ヒナギクの全裸。

着替えの際には屹度、お互いの裸を見せ合っているのだろう。そんな事を妄想していると、ハヤテは勃起をしてしまい、慌てて息子を押さえる。

（何だこの感覚は。病気なのか？）

ハヤテが心中でそう思うと、全身半透明のヒナギクが突然現れて答える。

「病気じゃないわよ。それは勃起と言って、男性が性的な興奮をした際に陰茎いんけいが太く長く硬くなり上を向く現象。この状態の陰茎をギリシャ語でファルスと呼び、一般的に知られているペニス、つまりおちんちんとは区別するらしいわ。俗語の範疇では勃つとかピンビンになるとか表現されてるのよ」

「うわっ、ヒナギクさんいつの間に!？」

驚いたハヤテがキッチンを確認めると、そこにはまかない制作中のヒナギクが居る。

「ヒナギクさんが二人？」

こっちにヒナギク、あっちにもヒナギク。ハヤテは我が目を疑った。

「あの、これは一体どう言う事ですか？」

ハヤテの問いに、半透明ヒナギクはエンジェルとの一件について説明した。

「成る程。って、そんな事があるんですか？て言うか勃起とかそういう性的知識は年齢制限あるので抑えて下さい」

「それなら問題無いわよ。表紙にちゃんと15歳未満の閲覧を禁止する注意書きがあるから」

「そうですか」

と返したのと同時に、キッチンに居るヒナギクが朝食を作り終えて食卓に運んできた。

「じゃあ、私は御暇おいとまするわね」

言って半透明ヒナギクは姿を消した。

（何だったんだ、あの人は？）

と首を傾げるハヤテ。

その間に、ヒナギクは食事を並べ終えていた。

「ハヤテくん、食べましょう?」

「え?あ、はい!」

ハヤテは座ると、手を合わせて「頂きます」を言つて箸を取り、御飯を口に運んだ。

もぐもぐと咀嚼するハヤテ。

「美味しいです、ヒナギクさん」

「そう。そう言つて貰えると、一生懸命作つた甲斐があつたわ」
言つてヒナギクは笑みを浮かべた。

「御馳走様でした」

朝食を食べ終えたハヤテは箸を置いてそう言う。

「ハヤテくん、ほつぺたに御飯粒が付いてるわよ」

「え、何処？」

ハヤテは右手で右頬を触つた。

「逆よ」

とヒナギクが反対側に頬に手を伸ばし、御飯粒を取つてに口に運ぶ。

ハヤテはその行為に頬を赤くしてしまった。

「あ、あの、ヒナギクさん？」

「ん、何？」

「僕の記憶喪失つて、何が原因なんですか？」

その問いにヒナギクは顔を顰めた。

「どうやら、触れられたくない様だ。」

話してしまつたら、ハヤテの事だ。屹度、手術をすると言つに違い無い。

だから、こう答えるしか無かつた。

「ごめん、分からないの。医者に訊いても教えてくれなくて・・・」

「はあ、そうですか・・・」

言つてハヤテは肩を竦める。

「所でヒナギクさん。先刻から気になっていたんですが、どうして白皇の制服を着てるんです？」

「ああ、それはあれよ。この服を着てれば、白皇に忍び込んでも怪しまれないから。一応、この後行く予定なんだけど」

「どうしてですか？」

「決まってるでしょ。あなたに記憶を取り戻して貰う為よ」

「では行きましょうか」

そう言ってハヤテは立ち上がり、食器を流しにある桶に溜まった水に浸け、玄関に移動した。

その直後、ヒナギクがやって来る。

二人は靴を履き、家を跡にした。

第18話：記憶喪失（後書き）

ストーリーを考え書いてて、今気付いたんだが、智 ア ターに酷似してるな。って、まあぶっちゃけると意識してたんですけどね。それにハヤテは元はギャグですから、何かネタにしないと面白味に欠ける。そう言う訳で、オマージュとして智 ア ターの終盤をネタにした訳ですが……。つい此処まで書くにあれだよな。ハヤテが今後どうなるのか、読者の方に判ってしまいそうで怖い。所で、こんな仮説を立ててみた。

ヒナギクはハヤテの妹説。

桂姉妹とハヤテって、境遇が全く同じですよ。両親に捨てられたと言う。

実はですね、ハヤテが兄だと思っていた人物は、従兄^{いとこ}なんです。ハヤテの本来の家族構成はこう。（携帯の場合、文字サイズを極小にすると見やすい）

母 父 兄（又は弟） 妻

雪路 颯 雛菊

息子

（颯の従兄）

この表を元に推察すると、恐らくハヤテは生後間もなく、父方の兄（若しくは弟）夫婦に養子として預けられたのだろう。しかし、預けられた先でも単行本一巻の冒頭の様に、捨てられた。156 / 804,000円の借金を押し付けられて。一方、ハヤテの実父ら。

こちらはハヤテを預けた後、直ぐにヒナギクを授かって暫くは頑張る訳ですが、結局は生活が苦しくなり、両親は「雪路はもう高校生だから大丈夫だろう」と踏んで二人を見捨てて何処かへ行ってしまった。

つまり何が言いたいのかというと、桂姉妹の気になる旧姓は綾崎なのでは？と言う事です。

もしこの仮説が事実ならば、冬ソナのような禁断のラブストーリーが書けそうな気がするのですがね。

第19話：色々衝撃（前書き）

色んな意味で衝撃的な第19話。

「・・・。。by・ヒナギク」

第19話：色々衝撃

これは、ハヤテが記憶を失ってから、一週間経った日の事だ。

ヒナギクはその日、学校を休んで病院に来ていた。

目の前にはベッドがあり、ハヤテが眠っている。

「ハヤテくん、朝よ。起きて」

ヒナギクはそう言っただけでハヤテを揺さぶる。

「ん・・・ん・・・？」

ハヤテは目を開け、ヒナギクを見た。

「おはよう、ハヤテくん」

と微笑むヒナギク。

ハヤテは疑問符を浮かべた。

「えっと、あなたは？どうして僕の名前を」

その言葉に、ヒナギクは固まった。

（落ち着くのよ、ヒナギク。屹度気が動転してるのよ。うん、そうよ）

「ハヤテくん、昨日の事思い出してみて」

「昨日ですか？」

ハヤテは記憶を辿った。

「昨日は確か、三千院家に住み込みの執事として雇って貰った日です」

「・・・」

ヒナギクは言葉を失った。

「どうしたんですか、そんな哀しそうな顔して？」

「え？あ、何でも無いわ。それより、今日は何年何月何日かしら？」

「2004年の12月26日です」

「違うわよバカ。今日は2月9日よ」

ヒナギクが言っと、ハヤテは顔を顰めた。

「どうして初対面の人にバカ呼ばわりされなきゃいけないんですか」

と言うか、あなた一体誰ですか？」

ハヤテの問いにヒナギクは肩を竦めながら溜め息を吐いた。

「ハヤテくん、私の事忘れちゃったの？」

「その前に僕はあなたを知りません。それに、会った事も無いです」
その言葉に、ヒナギクはショックを受けた。

（死にたい・・・）

「あ、すみません。傷付けちゃいましたか。所で先刻、2月9日つて言っていましたけど、と言う事なんでしょうか。もしかして、僕は3ヶ月間の記憶を失っているんですか？」

その問いにヒナギクは首を振るった。勿論、横に。

「え？」

「あなたが失っているのは、1年と3ヶ月分の記憶よ」

「えっ・・・？」

「記憶喪失になったのは一週間前からだけど。そんな事より、先生を呼んでくるわ」

そう言つてヒナギクは病室を出て行つた。

（何なんだ、あの人？僕の事知ってるみたいだったけど・・・）

ハヤテは記憶を遡ってみる。

（駄目だ。分らない）

とその時、ヒナギクがドクターを連れて戻つて来た。

「先生、彼の記憶が飛んでるんです。一体どうしたら・・・？」

「また飛んだんですか。ではMRIを取ってみましょう」

ドクターはそう言つと、ハヤテに近付いた。

「綾崎さん。これから脳の検査をしたいのですが、宜しいでしょうか？」

ドクターの問いにハヤテは「はい」と頷く。

「では付いて来て下さい」

ドクターが言つと、ハヤテはベッドから降り、ドクターと共に脳の検査をしに行った。

ハヤテのMRIの検査結果が出ると、ヒナギクは脳外科の診察室に呼ばれた。

患者用の丸い椅子に座り訊ねる。

「先生、どうだったんですか？」

ドクターは一枚の写真をヒナギクに見せる。

「これは綾崎さんの脳の写真なんです、此处に白い影が見えるのが解るでしょう？」

とドクターが脳皮質の記憶を司る側頭葉にあるそれらしい物を指差す。

「これは？」

「腫瘍しゅようです。恐らく、事故の影響で頭を打って、内出血が起ったのではないかと思われます。彼が記憶喪失なのはこれが原因じゃないかと考えられるのですが・・・」

ドクターは深刻そうな顔でそう言った。

「これは、治るんでしょうか？」

その問いにドクターは唸り、答える。

「難しいでしょうね。場所が場所ですから、手術しても助かるかどうかは・・・」

「そんな・・・」

ドクターの言葉を聞いたヒナギクはショックのあまり俯うついてしまった。

「先生、手術しなかったらどうなるんでしょうか？」

「さあ・・・」

とドクターは肩を竦めた。

「そうですか。失礼します」

ヒナギクは立ち上がり、お辞儀をすると診察室を出た。

その彼女に、ハヤテが声を掛けてきた。

「検査の結果はどうでしたか？」

ヒナギクは笑みを浮かべる。

「大丈夫よ。異常は無いって。先生は一時的な物だから直ぐに治るって言ってたわ」

嘘付いてしまった。

（嘘付いてごめん、ハヤテくん）

ヒナギクは顔を逸らして心中で謝った。

「それじゃあ、僕はもう退院出来るんですね？」

「う、うん。勿論よ」

「それじゃあ退院の手続きを取りに行きましょう」

「そうね」

ヒナギクはそう返事をする、二人でロビーに移動して退院の手続きをし、お金を払って病院を出た。

「ハヤテくん。今から何処か遊びに行かない？」

「駄目ですよ。仕事がありますんで」

「執事の仕事ならクビにされたわよ」

「え？」

「聞こえなかったの？クビにされたのよ、クビ。丁度、今から1月前にね。それで、今は私の執事をやってるわ」

「そうですか。ではお言葉に甘えて遊びに行きましようか」

「それじゃあ退院祝いに何か奢ってあげる」

「あ、でもヒナギクさん。今、制服を着てますよね。駄目ですよ、学校はちゃんと行かなくちゃ。学校はどちらなんです？送りますよ」

「白皇学院よ」

「へえ、白皇学院ですか。って、白皇学院！？白皇学院って言った、小中高一貫の有名進学校じゃないですか！ヒナギクさん、そんな所に通ってるんですか！？でしたら尚更行かなきゃ駄目ですよ！」
「大丈夫よ、行かなくても。ウチの学校は出席日数なんて成績に響かないんだから。試験を受けて良い成績を取ればそれで良いの。だから、ね？」

と円らな瞳でハヤテを見詰める。

（何だその顔は？とても断りづらい）

「解りました。では何処かに遊びに行きましょう」

ハヤテはそう言って歩き出した。

「何処に連れてってくれるの？」

ヒナギクがハヤテの横に並び訊ねる。

「そうですね。何処行きます？」

その問いにヒナギクはズザーツと転んで滑る。

「あんたね、考えてから行動しなさいよ」

「すみません。て言うかスカートの内側が見えるんで滑らないでくれますか？」

「別に見えたって平気よ。スパッツだもの」

ヒナギクは立ち上がり、スカートを大胆に捲ってみせる。

「うわっ！一寸ヒナギクさん、早く仕舞って下さい！」

ハヤテはそう言って顔を赤く染め、慌てて後ろを向いて顔を隠した。

すると同時に、通り掛かった散歩中の親子がこんな会話をした。

「ママー、あのお姉ちゃん見てー。パンツ穿いてないよー」

その言葉に母親がチラツとヒナギクを見て「駄目よ見ちゃー！」と子どもの顔を隠し、去って行った。

ヒナギクは自分の目でスカートの下を確認した。

（はっ、スパッツ穿くの忘れた！）

第19話：色々衝撃（後書き）

スパッツ穿き忘れるなんて相当間抜けだな、ヒナギク。大方、朝風呂の後、寝惚けて着替えたか、慌てて着替えたかのどちらだろう。

第20話：好きです！僕と結婚して下さい！（前書き）

ハヤテがヒナギクにプロポーズする感動の第20話。

「愛してます、ヒナギクさん。作者は泣きながら書きました。by
ハヤテ」

第20話：好きです！僕と結婚して下さい！

白皇学院に着き、校門を抜け、鳥の巣がある木の前に赴く二人。

「私たちは此処で初めて会ったの。あの時、私はあの巣から落ちた雛鳥を助ける為に登ったのは良いんだけど、足が竦んで降りられなくてね。そこへ丁度、あなたが現れたの」

「それで、その後はどうしたんですか？」

「あなたに受け止めて貰おうと思って、飛び下りた」

「それで、僕は受け止めたんでしょうか？」

「受け止めたわ。見事に顔でね」

「……………」

ハヤテは言葉を失った。

（よく今まで生きてこれたなあ、僕）

そんな事を思っていると、ヒナギクが時計塔に向かって歩き出す。

「何処行くんですか？」

「あそこよ」

ヒナギクは時計塔の最上階を指差した。

「あそこに何があるんですか？」

「行けば分かるわ付いて来て」

「はい」

ハヤテはヒナギクの後ろを歩き出した。

時計塔に辿り着き、エレベーターに乗って最上階へ上り、生徒会室に入る。

「此処は生徒会室。生徒会役員と許可を貰った人しか入れない特別な部屋なの」

「そんな所に勝手に入って大丈夫なんですか？」

「大丈夫よ。だって私、三年連続で生徒会長だったから」

「そうなんですか。でも今は卒業して、会長じゃありませんよね？」
ハヤテがそう問うとヒナギクが睨んだ。

「私が良いって言ったら良いのよ！」

それより　と笑顔に変えて「こっちに来て」とハヤテの手を掴み、バルコニーへ出る。

そこには、白皇の敷地を全て見渡せるほどの絶景が広がっている。
「い、良い眺めでしょ？」

ヒナギクは恐怖のあまり、体を震わせながらそう言った。

「あの、ヒナギクさん。高い所怖いんですか？」

「そ、そんな事無いわよ？」

と絶景を眺めるヒナギク。

（怖い……。でも頑張らなくちゃ。頑張ってハヤテさんの記憶を取り戻すのよ）

と思ってみても、足が竦み耐えきれずにしゃがんでしまった。

「やっぱ怖いんですね」

「こ、怖くなんかないんだから！」

「そんな否定しなくても、誰も気にしませんよそんな事。それに、僕にだって怖いものがあります」

「ハヤテさんの怖いものって？」

「暗くて狭い所です。僕が未だ小さい頃、親の言う事を聴かなかった時があり、その時に押し入れに閉じ込められた事があるんですけど、それ以来、閉所恐怖症になってしまいました」

「そうなんだ。でも先刻は平気な顔でエレベーター乗ってたわよ？」

「ああ、電気があつて明るかったですから。それより僕、もっと他にも回ってみたいです。案内してくれませんか？」

「解ったわ」

ヒナギクは立ち上がり、ハヤテを連れてエレベーターに乗る。

ボタンを押し、扉を閉めると、カゴが動き出した。

ガコン！

突如、カゴが停止して電気が消え、真っ暗になった。

「て、停電!？」

と驚くヒナギクに、ハヤテがしがみついた。

「ちよつ、何すんの!？」

「すみません、突然。でも許して下さい。怖いんです」

「ハヤテくん・・・」

ヒナギクは微笑んだ。

「安心して。私が付いてるわ」

ヒナギクはそう言つてハヤテを抱き締めた。

その途端、ハヤテの心臓が高鳴る。

(嗚呼、何て優しい方なんだ。僕は今、この人の事が好きになりました)

ハヤテはそう思うと、唾を飲み込んだ。

「ヒナギクさん」

「何、ハヤテくん？」

「僕の記憶つて、また失くなるんでしょうか？」

「うん」

「予兆とかあるんですか？」

「あるわ。その時になると、激しい頭痛に見舞われるの。そして意識を失つて、次目を覚ました時、一週間の間に作つた記憶が失くなつてるの。そんな状態が続いてからもう2年が絶つわ。私はこの2年間、とても辛く、寂しかった」

そこでヒナギクは涙を流す。

「私は思った。私が好きになつた人は皆、私の前から居なくなる。お実父^{とう}さんも、お実母^{かあ}さんも。そしてあなたも。こんな思いをするくらいなら、こんな人生要らない。そう思つて、自殺も考えたわ。でも、出来なかった。あなたを残しては、死ねなかったのよ!」

ヒナギクはハヤテへの思いを、好きだと言う思いを一気に解き放つた。

「ヒナギクさん・・・」

ハヤテは思つた。

（知らなかった。僕の事思ってくれてる人が居たなんて。そしてそんな人がそこまで追い詰められてるなんて知らなかった。僕は最低だ。今の僕に何が出来るかとは分からないけど、せめてこれだけは伝えたい。僕の記憶が、失くなる前に）

だからハヤテは、この言葉を彼女に伝える。

「結婚・・・して下さい」

その言葉に驚いたヒナギクは「え!？」と目を丸くする。

「僕が今抱いている感情は、次に頭痛が訪れた時、記憶と共に失われてしまう。だから、そうなる前に何としてもやっておかなきゃいけない。だから・・・」

「ハヤテくん？」

「ヒナギクさん」

ハヤテはヒナギクの顔を捕え、真剣な眼差しで見詰める。

「僕と・・・結婚して下さい!」

（結婚？私とハヤテくんが？判った、もう迷わない）

ヒナギクにはこの2年間、考えていた事がある。

それは、ハヤテの手術である。

彼の脳には今、腫瘍が出来ている。それは、記憶を司る側頭葉にあり、手術がとても難しい。失敗すれば、死ぬかも知れない。だからヒナギクは迷っていたのだ。でも

もう迷わない。迷いは吹っ切れたのだ。

「解った。結婚しよう。それと、私からも一つ、お願いがあるの」

「お願い？」

「あなたの記憶喪失は、側頭葉って言う脳の一部に腫瘍があるからなの。これを手術で除去すれば、あなたは記憶を取り戻せると思うの。だけど、失敗する確率の方が高い。失敗すれば、あなたは確実に死ぬ事になる。それでも良い？」

「構いませんよ。それで僕の、ヒナギクさんとの思い出を取り戻せるなら、僕は手術を受けます」

「・・・解ったわ。担当医に頼んでみる」

「お願いします」

そう言うとはヤテは、ヒナギクの唇を奪った。それと同時に、電気が点いてカゴが動き出す。

しかし、二人はそんな事に気付かず、キッスを続ける。

お互いの口内に舌を押し込み合うディープキス。フレンチキスとも言う。

「お熱いですね、二人とも」

突然、扉の方から声。

振り向くと、いつの間にか地上に着いており、扉が開いている。外には現生徒会長の日比野 文。

「うわっ、日比野さん！って、此处で見た事は内緒よ！？」

ヒナギクはそう言う、ハヤテを連れて慌てて去って行った。

第20話：好きです！僕と結婚して下さい！（後書き）

てーな訳で、次回はハヤテが手術を受けます。

次回、ハヤテのごとく！最終話。「愛は永遠に」

「これ、ゲームにしたら売れるんじゃないかな？b y ・ヒナギク」

「そうですね。b y ・ハヤテ」

最終話・さよならハヤテくん でも絶望はしない（前書き）

最終話と言つ事で、読者サービスとして長くさせて頂きました。
最後まで御堪能下さい。

最終話：さよならハヤテくん でも絶望はしない

2月8日午前9時。

ハヤテは目を覚ました。

白い天井、白いベッド。そして部屋からする消毒の臭い。^{にお}

ハヤテは此処が何処なのか、検討が付くまでに時間は掛からなかった。

隣では、美しい女性が椅子に座って居眠りをしていた。

（誰だろう、この人。僕の知ってる人かな？）

とその時、その女性が目を開けた。

「おはよう、ハヤテくん」

と笑みを浮かべる女性。

「あの、どちら様ですか？」

「私？私は、綾崎 雛菊。あなたの女房よ。ヒナギクって呼んでね」

「はい？」

ハヤテは目を丸くした。

「これ見て」

ヒナギクはそう言っで自分の右手を見せた。

薬指には銀色に光る結婚指輪が嵌められている。

「あなたの右手にも同じ物があるわ」

ハヤテは自分の右手を見た。

中指には、彼女の言う通り、同じ物が嵌っていた。

「あの、どう言う事ですか？」

その問いにヒナギクは肩を竦めた。

「覚えてないのも無理無いわよね。あなたは今、記憶喪失なの」

「そうなんですか？」

とハヤテはヒナギクを見る。

「そう。で、昨日、籍を入れたばかりなのよ」

ハヤテは再び指輪を見た。

（何だろう、この感じ。全然知らないけど、僕とこの人は愛し合ってる、のか？）

「ねえ、聴いてハヤテくん」

「はい、何ですか？」

「今日ね、これから手術があるの」

ハヤテは、誰の、と言う顔をした。

「あなたのよ。今、あなたの脳には腫瘍が出来てるの。だからそれを手術で除去するのよ。そうすれば、あなたの記憶が戻るの」

「そうなんですか。それじゃあ、成功したらまた逢いましょう」

「うん」

ヒナギクは立ち上がり「先生を呼んでくるね」と病室を出て行った。

それから暫くして、ヒナギクがドクターを連れて来た。

彼が本日、ハヤテの手術を担当する医師だ。

「では綾崎さん、手術室に行きますね。付いてきて下さい」

ドクターが言うと、ハヤテがベッドから降りた。

「こちらです」

ドクターはハヤテと共に病室を出て手術室に向かった。

ヒナギクはその後を追いつ、手術室の前でハヤテと別れると、側にある椅子に腰掛け、手を組んで祈り始めた。

（お願い神様！どうかハヤテくんの手術を成功させて下さい！）

「さん。綾崎さん」

声がした。

ヒナギクが目を開けると、そこにはドクターが居た。

「先生、手術は！？」

「成功です。旦那さんは記憶を取り戻されました」

ドクターはそう言つて手術室の前を指差した。

ヒナギクがその方向を見ると、車椅子に乗り、頭に包帯を巻いた

ハヤテがそこに居た。

「ハヤテくん！」

と立ち上がり、駆け寄るヒナギク。

「本当に記憶が戻ったの！？」

「全部戻りましたよ」

ハヤテはそう言つて笑みを浮かべた。

「マラソン大会の日に遭った事とか、その他飛んでしまった2年分の記憶、全部戻りましたよ」

ヒナギクはその言葉に嬉しくなり、涙を流した。

「全く、どれだけ心配掛けたと思ってるのよ。でも良かった。手術が成功して」

そう言つてヒナギクは、ハヤテを思いつ切り抱き締めた。

「うおっ！？一寸ヒナギクさん、苦しいです！」

「あ、ごめん」

ヒナギクは腕を緩めた。

「あの、奥さん」

とドクターが声を掛ける。

「何ですか？」

ヒナギクはドクターに振り向いた。

「術後ですので、暫く安静にさせてあげて下さい。それから、経過を見るので、暫くは車椅子での生活をして貰います」

「解りました。外出の方は？」

「それは自由にして頂いて結構ですが、あまり無理はさせない様をお願いします。では」

ドクターは頭を下げると去って行った。
ぐう

ヒナギクの腹が鳴った。

「ハヤテくん、何か食べに行かない？」

「はい、行きましょう」

ヒナギクは後ろに回り、車椅子を押して歩き出す。

「所でヒナギクさん、手術費は誰が？」

「ナギよ」

「それじゃあ、お礼しないといけませんね。今何時です？」

ヒナギクは腕時計を確認する。

「1時よ」

「ではどんぐり喫茶に行きましょう。この時間なら、そこでバイトをしてる筈なので」

「解ったわ」

ヒナギクはロビーに移動し、外出届を提出してどんぐり喫茶に向かう。

どんぐり喫茶に着き、中に入る二人。

すると、いきなりクラッカーが鳴り、天井に吊られていたくす玉が開き、<ハヤテ・ヒナギク 結婚おめでとう！>と縦に書かれた紙が出現した。

そして、マスターの加賀^{かが} 北斗、三千院 凧、マリア、鷺ノ宮

伊澄、愛沢^{あいざわ} 咲夜、西沢 歩、桂 雪路、橘^{たちばな} 亘、貴嶋 サキ、東

宮^{あずまみや} 光太郎が、二人の前に出て来た。

「何なんですか、これは？」

ハヤテが訊ねると、ナギが答えた。

「何って、お前たちの結婚パーティだよ。ハムスターが言いだしっぺなんだ」

「一寸、ハムスターって言わないでくれるかな！？」

とあだ名がハムスターの普通少女が膨れた。

そんな彼女を尻目にナギが、

「よしお前たち、作戦開始だ！」

と叫ぶと、皆が動き出して準備を始めた。

店のテーブルが片付けられ、真ん中に長机が置かれ、豪華な料理が運ばれてくる。

「うわあ、美味しそう」

言ってヒナギクはよだれをハヤテの頭に垂らした。

「ぬわっ！ヒナギクさん、よだれ垂れてますよ！」

「え、嘘！？」

ヒナギクは口を拭いた。

よだれが服の袖に染み込む。

「ごめん、ハヤテくん」

「否、別に良いですよ。気にしてませんから。それより食べましょう」

ハヤテはそう言っ、タイヤを手で回してテーブルの前に移動した。

「待つてよ、ハヤテくん」

とヒナギクがハヤテの横に椅子を置いて座る。

するとナギが叫んだ。

「よし、準備が出来た所で、パーティの開始だ！」

こうして、ハヤテとヒナギクの結婚パーティが開始された。

それは、夕方まで盛大に続いた。

そしてパーティが終盤に近付き、ハヤテから一言。

「今日は皆さん、僕たちの為にこんな素敵なおパーティを開いて頂き、本当に有り難う御座います。そして、ナギお嬢様。お嬢様には僕の手術費を出して頂きました。僕が今、こうしているのも、全てお嬢様のお陰です。この御恩は一生忘れません！」

続いてヒナギクが一言。

「ナギ。あの日、あなたが思い付きで私をダンスのリベンジ戦に呼んでくれなかったら、こんな嬉しい事は無かった。感謝してるわ。」

歩。あなたとはハヤテくんを巡って色々遭ったけど、とても楽しかったわ。これから仲良くしましょう。お姉ちゃん。私が

出て行っても、お酒飲みすぎない様にね。

東宮くん。あなたの

気持ちに答えられなくてごめんなさい」

二人が言い終えると、盛大な拍手が沸き起こった。

「それじゃあ、私たちは病院に戻るわ。皆、さようなら」

ヒナギクはそう言って、ハヤテを連れて喫茶店を出ると、病院に向かつて歩き出した。

「ヒナギクさん、少し寄り道しませんか？」

「え、でももう時間が」

「良いですよ、病院なんて。それより、僕はヒナギクさんと一緒に居たい」

「そう。解ったわ。何処に行く？」

「そうですねえ」

ハヤテは考える。

「白皇にしましょう。僕たちが最初に出会ったあの場所」

「解ったわ」

ヒナギクは進路を変更して白皇学院に向かった。

白皇に着き、校門を潜り、あの場所へと辿り着く二人。

「懐かしいですね」

「そうね」

「あ、鳥さんですよ。チャー坊じゃないですか、あれ？」

ハヤテは木の上にある、鳥の巣に向かつて飛んで来る一羽の鳥を指した。

「本当だ。大きくなっ たわね」

とヒナギク。

「チャー坊！」

ヒナギクはチャー坊に手を振った。

チャー坊はそれに気付くと、空高く舞い上がり、空中に文字を書く。

「あの時は助けてくれて有り難う」と。

「あの、ヒナギクさん」

「何？」

「喉が乾きました。オレンジジュースを買って来て頂けませんか？」
「解ったわ。一寸待って」

ヒナギクはそう言って、校内に設置してある自販機へと向かった。
残されたハヤテは、無言でヒナギクを見送り、目を瞑った。
(さようなら、ヒナギクさん)

ガタン！

自販機のボタンを押すと、オレンジジュースが落ちてきた。
ヒナギクはそれを取り、ハヤテの下に戻った。

「ハヤテくん、買って・・・」

そこまで言い掛けて、ヒナギクはジュースの缶を落とす。

「ハヤテくん！？」

ヒナギクは駆け寄り、ハヤテを揺さぶる。

しかし、ハヤテは目を開けない。それどころか、呼吸すらしていないのだ。

「ハヤテくん、起きて！起きなさいハヤテ！あんたまた私を一人ぼっちにさせる気！？」

言いながらハヤテの頬を引つ叩くヒナギク。
だがハヤテは、うんともすんとも言わない

*

あれから、5年の歳月が経った。

練馬区の負け犬霊園と言う所に、＜綾崎家之墓＞と書かれた墓石が立てられている。

側面には、綾崎 颯の名前が掘られていた。

享年19才。

ヒナギクは、その墓石の前に、赤ん坊を抱いて立っていた。

「久しぶりね、ハヤテくん。元気してた？って、死んじゃってるからそれは無いか」

と苦笑するヒナギク。

「今日はね、あなたに報告があつて来たのよ」

そう言つて、抱えている赤ん坊を墓石に近付ける。

「あなたと私の間に出来た子どもよ。女の子なんだ。名前？名前は、心。綾崎^{あやさき} 心^{こころ}って言うの。今年で2歳になるわ。誕生日がね、あなたと同じ11月11日なの。ひよつとして、あなたの生まれ変わりがだつたりしてね」

そう言つてヒナギクは笑った。

「ママ」

心が何かを訴えてきた。

「はいはい」

ヒナギクは心を抱き寄せた。

「じゃあ、心が帰りがつてから帰るわね」

ヒナギクはそう言つと、会釈をして墓石から離れる。

その時、奇跡は起こった。

「ヒナギクさん」

「えっ？」

声に驚き、振り返ると、墓石の前にハヤテが立っていた。

「ハヤテくん！？」

ヒナギクは駆け寄った。

「久しぶりですね、ヒナギクさん」

ピシッ！

ヒナギクの平手打ちがハヤテの頬に放たれた。

「いたっ！何するんですか！？」

「バカ！どうして何も言わず居なくなるのよ！？」

「……………」

「あなたの居ない5年間、どれだけ寂しかったか……。でも、また逢えて嬉しい」

とヒナギクは嬉し涙を流す。

「僕もですよ、ヒナギクさん」

そう言つてハヤテは、唇をヒナギクのそれに近付ける。しかし

「お待ちなさい！」

そこへ伊澄が現れてそう叫んだ。

「ちっ」

ハヤテは舌打ちをして振り向く。

「ハヤテ様、生徒会長さんは騙せても、私の目は誤魔化せません！
怨念を捨てて成仏して下さい」

「伊澄さん、それどう言う事？」

「御説明致しますわ。そのハヤテ様は、生徒会長さんに逢えないと言つ哀しみと、もつと生きていたいと言つ思いが重なつて出来た悪霊。そして今、キスしようとしていたのは、生徒会長さんの体に乗っ取る為です」

「何を証拠にそんな事言つてるんですか、伊澄さん」

と伊澄に近付くハヤテ。

「八葉六式」

伊澄はお札を取り出してハヤテに投げた。

「撃破滅却」

しかし、ハヤテは素早くそれを避けて前に出る。

その後ろで、お札が爆発する。

「邪魔をすると言ふなら、伊澄さんから先に消しますよ！」

言つてハヤテは伊澄の懷に飛び込んだ。

「きゃっ！」

ハヤテの攻撃で吹っ飛ぶ伊澄。

「流石ハヤテ様。本気で行かせて頂きます」

伊澄は立ち上がり、ハヤテを張つ倒そうと懷に飛ぶ。

しかしハヤテがひらりと身かわし、伊澄はそのまま地面に落下

して滑る。

「どうしたんですか、伊澄さん？」

「八葉六式、撃破滅却！」

ドカーン！

いつの間にかハヤテの懷に挟まっていたお札が爆発を起こした。黒煙が立ち込め、視界を遮り、やがて消えると、無傷のハヤテ。「そ、そんな！？私の力が及ばないなんて！」

「終わりです、伊澄さん」

言ってハヤテがトドメを刺しに掛かる。しかし、そこへヒナギクが立ちはだかった。

「辞めてハヤテくん！この私の体が欲しかったら、あげるから、伊澄さんを危め^{あや}ないで！」

「ヒナギクさん」

とハヤテが立ち止まる。

「生徒会長さん」

と伊澄が立ち上がる。

「伊澄さん、預かってて」

ヒナギクは振り向き、子どもを渡してハヤテに向き直った。

「さあ、入りなさい」

と一歩前に出るヒナギク。

「欲しいんでしょう？私の生身の体が」

「・・・・・・」

ハヤテは後退りを始めた。

「何で逃げるのよ？」

と付いて行くヒナギク。

「あげるって言うてるんだから、遠慮せずに乗っ取りなさいよ。ほら」

しかしハヤテは行動に移さない。

「別にあんたに乗っ取られても、私は気にしないから」

「ヒナギクさん」

ハヤテは立ち止まった。

それに釣られてヒナギクも止まる。

「うっ、うわああああ！」

ハヤテは頭を抱えて叫んだ。

「ハヤテくん!？」

「心配する必要は御座いません。ハヤテ様は今、己の中の自我と怨念が戦っています。愛の力は凄いです」

二人が様子を見ていると、ハヤテは落ち着き、理性を取り戻してヒナギクを見た。

「ヒナギクさん」

「ハヤテ・・・くん？」

「はい、いつもの僕ですよ」

「ハヤテくん！」

ヒナギクはハヤテの懷に飛んだ。しかし、そのまま透過して地面に顔面から突っ込む。

「先刻は触れたのに何ですよ？」

「善の靈には怨念がありませんので、特別な能力が無くては触る事は出来ません」

「何よ。それじゃあ抱き締める事も、キスする事も出来ないじゃないのよ」

ヒナギクが落ち込むと、伊澄が言った。

「出来ますよ」

「どうやって？」

伊澄は辺りを見回し、赤ん坊に「此处に居てくれる？」とハヤテの墓石の前に座らせた。

「ハヤテ様、私の体を使って下さい」

言って伊澄は、ハヤテに触れて口を開けた。

するとハヤテの体は白煙となって伊澄の口内に吸い込まれて行った。

直後、伊澄の体が発光をしてハヤテの姿に変わる。

ヒナギクは何が起きたのかさっぱり解らない。

「ハヤテくん・・・なの？」

そう訊ねると、ハヤテは振り向いて頷いた。

「伊澄さんが幻を見せてるんじゃないくて、本当にハヤテくんなの？」

「ええ、そうですよ」

ヒナギクは立ち上がり、ハヤテに近付いた。

「ハヤテくん、逢いたかったわ」

「僕もです、ヒナギクさん」

二人は互いに抱き合った。

「あの」

二人の声が同時に重なる。

「は、ハヤテくんからどうぞ」

「いえ、ヒナギクさんから」

「じゃあ一緒に」

「解りました」

二人は息を吸い、言葉を放つ。

「キスして」下さい」

二人はそれに応えて口付けを交す。

永い。

永い。

とても永い。

「ふはっ！」

二人は唇を離した。

「すみません、ヒナギクさん。僕、もう逝かなくちゃ」

「その前に心に顔見せてあげて」

ヒナギクは墓石の前に移動すると、心を抱き上げてハヤテの下に戻る。

「私たちの子どもの心よ。見て」

ハヤテは心の顔を拝む。

「へえ。ヒナギクさんそっくりで可愛いですね」

「髪の色もハヤテくんと一緒に似合ってるわよ」

「そうですね。それにしても、心って、変わった名前ですね」

「どう言う意味よそれ!？」

ヒナギクがハヤテを睨んだ。

「ひ、ヒナギクさんらしくて良いですねって意味ですよ!別にヒナギクさんのネーミングセンスがどうかしてるとかそういう意味で言った訳じゃありませんから!」

ピキッ!

ヒナギクの額に青筋が立つ。

「ふーん。そう言う意味なんだ?」

ヒナギクは顔を顰め正宗を召喚した。

「一寸待って下さい、ヒナギクさん。そんなので攻撃したら、この体は伊澄さんのだから、伊澄さんの体に傷が付きますよ?」

ハヤテは顔を引き攣らせてそう言った。

「知るか!」

ヒナギクは正宗を振るい、ハヤテを攻撃した。

「いたっ!辞めて下さい、ヒナギクさん!」

「うっさいバカ!あんたなんかとつと逝ってしまえ!」

そう言って連撃を繰り出すヒナギク。

「いてっ!解りました、お望み通りもう逝きます!ですから辞めて下さい!」

ハヤテがそう言っつと、天から光りが射した。

それと同時にヒナギクは手を止めた。

「それじゃあ、もう逝きます」

とハヤテは立ち上がり、ヒナギクを見る。

「ねえ、ハヤテくん」

「はい?」

「また、逢えるかな?」

「ええ、お盆の日に」

「じゃあその時、デートしよう?心と三人で。ん?伊澄さんも入る

から四人か？まあ良いや」

「解りました。ではその日、伊澄さんと一緒に迎えに行きます」

「うん」

「では」

ハヤテは頭を下げ、直ると伊澄の体に戻った。

そしてその体から光りとなったハヤテが抜け出し、天へと昇って逝った。

（またね、ハヤテくん）

ヒナギクは空を見上げ、ハヤテを見送った。
すると、空にハヤテの笑顔が浮かんだ。

「あの、生徒会長さん」

伊澄に呼ばれ、顔を彼女に向ける。

「身体中が痣だらけでとても痛いのですが？」

（はっ！）

ヒナギクは伊澄の身体を見て真っ白になり、丸で石の様に固まった。

最終話：さよならハヤテくん でも絶望はしない（後書き）

遂にハヤテのごとく！が最終回を迎えました。

読者の皆さん、如何でしたか？中には感動して泣いた方も居るかも知れません。

所で、バトル後の憑依なんですが、元ネタ解る人居ますかね？え、解らない？

答えは木曜の怪談。安達 祐実が出た奴ですね。

では、評価・感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5985d/>

僕がヒナギクさんでヒナギクさんが僕で

2010年10月8日10時31分発行